　「近隣の自然の変化に目を向ける　No. 1:  
 日本のサクラ Cerasus」

2020年4月8日

みなさんへ

主の御名を崇めます。

遂に緊急事態宣言が出されました。コロナウイルスの感染を抑えるために、少なくとも１ヶ月間外出を自粛する（命を第一にし、不要不急でない限りは）ことが要請されています。すでにアメリカやフランスや諸外国では、破った場合には罰則が課せられるほど徹底されています。日本では強制とはなっていませんが、手強いウイルス感染は差別せず、いつどこで感染するか分かりません。感染から自分を守り、他の人に移さないことが感染に拡がり（オーバーシュート／爆発的増加）を早く収めることになります。今まで以上に最前線で治療に当たる医療関係者のために祈り、応援することになります。しばらくの忍耐は、町で働く人々の生活と社会を守るという積極的な行為となる、と私は思わされています。

　そこで、外出自粛期間をどう過ごすか？が問われて来ます。

私は、定年退職人間として、仕事における緊急性の度合いは低く、多くの時間を自宅で過ごすことに慣れていますが、でも今の社会の危機に対して何かできることがあるか、考えています。そこで思いついた事が一つあります。２年ほど前までFBに「芦花公園と近隣シリーズ」という写真付きミニメッセージを100回掲載した時点で休止しましたが、ここでメルマガ「自粛広場から」を創設すると同時に、FBを再開することです。狙い（願い）は、自然の変化に目を向けることで、いくらかでもコロナ危機の中で、不安・イライラ・閉じこもりなどになりがちの心に癒やしを提供することができれば、花の写真撮影という私の趣味がお役に立てるのではないか、という思いです。

くどくど説明するのはこの辺でやめます。No.1 「日本のサクラ」を下にアップします。また、次のURLからもダウンロードできます。

[[http://sengawacx.com/LookNatureN01\_2020.jpg](http://www.sengawac.com/LookNatureN01_2020.jpg)](http://subsites.icu.ac.jp/people/yoshino/LookNatureN01_2020.jpg)

なお、今はキリスト教会では、受難週を迎えています。先日、「受難週の聖書朗読と祈りのカレンダー」を紹介しましたが、今日（4/8・水）の聖書箇所が間違っていることが分かりました。申し訳けありません。修正版を教会HPにアップしましたので、差し替えてご覧頂ければ幸いです。

<http://www.sengawac.com/passionWeek.html>

みなさんの健康と生活に神さまのご加護をお祈りします。

吉野輝雄

「近隣の自然の変化に目を向ける　No. 2**:**

季節外れの雪（春の雪）の写真 Spring snow」

2020年4月10日

主の御名を崇めます。

今日は、聖書によれば、イエスキリストが十字架に架かられ悲痛な死を遂げられた金曜日です。

父なる神にとっては愛する子が冤罪で死刑判決を受け、人として最も恥ずべき十字架刑に処せられた日でした。

母マリアにとってはどうだったでしょうか？ゴルゴタの丘の十字架上で苦しみに耐えて最期を遂げた息子の側で気絶寸前であったに違いありません。

12人の弟子たちは？ユダは、３年間師として従って来たイエスを権力者に売り渡し、他の11人は、死刑囚イエスの仲間として捕まることを恐れて逃げてしまったのです。

正に暗黒の出来事が起こったこの日を受難日(passion day)と呼ぶには相応しいと思いますが、今、キリスト教会ではグッドフライデイ(Good Friday)と呼んでいるのはなぜなのでしょうか？十字架の後に答えがあります。新約聖書を読み、教会での礼拝メッセージ（ライブと音声）を聞き、胸に十字架のネックレスを提げている信者に尋ねてみてください。

この日を聖金曜日(Holy Friday)と呼ぶ理由と深い関係があります。

　さて、今回の「自粛広場から」は、季節外れの雪（春の雪）の写真アルバムです。3/29(日)の朝から雪が降り続き、あっという間に地面を覆ってしまいました。 新型コロナのせいか、さすがに雪の中で遊んでいる子どもは見かけませんでしたが、木々に積もった雪や春の花が雪の中で咲いている様が面白いと思い、興奮しながら写真を撮りました。翌朝には、地表の雪はすでに解けていましたが、朝の体操仲間は芦花公園に集まって来ていました。この日は、オーストラリアから１年間留学していた女学生が帰国する前日で、フェアウエル（お別れ）の朝でした。コロナの影響でお別れの会食会を断念したのが心残りでした。

　“自然の変化”は、時に異季節外れの気象に出遭うことであり、人と人との関係の変化でもある、と思わされた写真アルバムです。

<http://sengawacx.com/LookNatureN02_2020.jpg>

新型コロナのオーバーシュートは、人間にとっては歓迎されざる変化（異変）ですが、ウイルスの側からしたらごく自然の行動なのかも知れません。

自然の中で生き、生かされている者として、絶滅させたい相手か、共存すべき相手か？

最近、朝日新聞で読んだ生物学者（福岡伸一氏の“撲滅することは不可能”）と社会学者（大澤真幸氏の”封じ込めは通用しない”）の見解が興味深かった。  
　とは言え、人類に集団免疫が出来上がり、特効薬、ワクチンを備蓄できる時を待ち望みたい。

「近隣の自然の変化に目を向ける　No. 3

チューリップとヤマブキ　 Tulips and Japanese roses 」  
 Happy Easter

2020年4月13日

主の御名を賛美します。

　昨日はイースター（復活祭）でした。Happy Easter!と挨拶を交わし、早朝、広場に集まり日の出を待って2000年前のキリスト復活を覚えて、新たな命に与った喜びと感謝を表します。子どもたちは、草むらに隠された玉子を捜します。玉子は良い子に玉子とお菓子を持ってきたことに由来すると言われています。サンタクロースを思い浮かべますね。でもなぜイースターにウサギと玉子なの？　“生命”という共通点があるから、です。玉子は分かると思いますが、野ウサギは多産でよく動き回る動物だからだそうです。ドイツではハーゼと言って野ウサギの肉が食されます。

　今年のイースターは、新型コロナのせいで教会に集まることが自粛され、玉子捜しも取り止めとなりました。子どもたちの楽しみが奪われ、元気に飛び回ることも諫められ、さびしいイースターでした。私は、50年余の教会生活の中で始めての経験でした。

　でも、イースター礼拝は行われました。仙川教会では、山岸牧師が力強くメッセージをされ、特別フルート賛美と祈りが捧げられ、毎日曜日集まっていた仲間にライブ配信されたのです。受難週の祈りを重ねた後の日曜日（キリストの復活を記念して定められた日）に共にイースターの意味を再確認しました。キリストの復活こそ、危機・困難に立ち向かう命と力の源であることを改めて確認し、新型コロナに負けない覚悟をかためたのです。 教会HPを開いてみていただきたい（http://www.sengawac.com）。

*Happy and peaceful Easter in Jesus Christ !*

　今回の「自粛広場から」では、春の喜びに溢れたチューリップとヤマブキを選んだ。

チュリップを見ると、幼稚園や保育園に集まっている子どもたちが思い浮かぶ。子どもたちが、庭で整列したり、円陣をつくって踊っている姿、また、チューリップの花を元気に歌っている姿とも重なる。雪にも負けないで園に通っていたのに、新型コロナで１ヶ月間も羽ばたけないのは、何ともかわいそうだ。

　一方、ヤマブキの花言葉は、**「気品」「崇高」。確かに、桜が終えた頃に咲くすがたは、黄色に衣替えした桜のようで、気品を感じる。白山吹の清楚さはまた格別だ。**

<http://sengawacx.com/LookNatureN03_2020.jpg>

**政府から７つの大都市に緊急事態宣言が出され、不要不急の外出と人の集まる営業を自粛するよう要請した。１ヶ月間、住民の8割が外出を自粛を実行すれば、クラスター感染だけでない特定不可能なルートによる汚染を封じ込めることができる、と専門家が予測している。個人営業者にはきつい要請である事は確かだが、政府が公平で信頼性と説得力のある保証を明示し、市民が一致して忍耐し、ウイルスの封じ込めを成就したいものだ。７割では２ヶ月ガマンとなる、それでは日本は疲れてしまい、社会経済の再生の力を削ぐことになるに違いない。いまこそ国の舵取り能力と判断力が問われる。**

**毎朝、先日からの感染者の増加グラフを見るたびに、見えざるウイルスの乱舞を叩きつぶしたくなる。しかし、恐れるのではなく今、自分ができる基本マナーと免疫力強化を心がけ、自粛協力をつづけるつもりだ。みなさん、ラグビーで知ったOne team精神を思い出そう！**

「近隣の自然の変化に目を向ける　No. 4:  
 春を彩る代表的な花 ツツジ Azalea, star of spring flowers」

2020年4月20日

主の御名を賛美します。

　今回は、春を彩る代表的な花 ツツジに目を向けます。仙川教会の最寄りの駅の一つが京王線のつつじヶ丘で、近くには多種多様なつつじを見せてくれる西沢つつじ園があります。写真は最近撮影した芦花公園近くのものですが、上段３種は、自然のまま咲いている素朴で清楚なツツジ。

　２段目のドウダンツツジの和名が灯台ツツジと知って、灯台ファンの私は興奮した。しかし、名前は、筒型の花が、結び灯り台という宮中の夜間の行事に使われる灯り台を思わせるからだと言う。満点の星という素敵な別名がある。木の周りに白い花が咲きそろった姿がその名の通りだ。中段の他の２種は、形が美しいツツジで、品種改良されたもののようだ。

　下段の３種はオオムラサキという園芸品種で、それぞれニックネームが付けられている。学名にはRhododendronという文字が入っていますが、サツキ（皐月）もシャクナゲ（石楠花）も同じです。つまり同種なのです。だから、品種改良が可能で他種多様な花が愛好家だけでなく、公園などで見られるわけです。

<http://sengawacx.com/LookNatureN04_2020.jpg>

自然は日々変化しています。春は花々が爆発的に咲き、心弾む季節を実感する時ですが、昨今オーバーシュートという言葉が、微小な異物の[爆発的](https://www.weblio.jp/content/%E7%88%86%E7%99%BA%E7%9A%84)[増加](https://www.weblio.jp/content/%E5%A2%97%E5%8A%A0)をさす意味で使われているので気持ちが揺れます。Covid-19の猛威に世界中が翻弄され、苦戦を強いられています。勝利するために今すべき事は何でしょうか？既にご承知かと思います。いつどこで感染するか分からない曲者ウイルスなので、特効薬ができ、退治法が確立するまでは、自分と他を守るために、外出控えることです。単純でありながら人間の本性と生きる必要を満たす行動にブレーキをかけることなので、実は難しいのです。それではガマン？いや、自他の命を守る行為であり、相互のつながり（関係）を生かすにはどうすれば良いのか考え、あきらめず、試行錯誤しながら関係を築く方法を創り出す時であると思わされています。

　そのためのエネルギーをどこから得るのか？それもこの度与えられている課題であるが、自然と向き合う中で得られると私は信じています。人も自然の一部であり、自然界の命との触れあいの中で癒やされ、活力を得、生きる目的に向かう根源的力を得ることができると考えているからです。しかし、活力の前に家族が生活していくための米びつが底をついていると言われるかも知れません。ここでは、生活を営む人間の命と働きを支えるものについて述べています。

　次回では、拡大増加を続けるウイルスの国内外の感染者数のデータと、いわゆる軽症の感染者の体験談を紹介したいと思います。

「近隣の自然の変化に目を向ける　No. 5」　  
 春を華やかに飾る花 Flowers Gorgeously decorating Spring」

2020年4月2８日

　まだ寒さが身にしみている頃、春の到来を告げる早春の花（梅、節分草、スノードロップなど）が開き始め、段々と温かくなる春の空気の中に咲く花（桜、菜の花、チューリップなど）が目立つようになり、私たちの目と心を浮き浮きとさせ、外出が楽しくなります。周りを見渡せば、いつの間にか色とりどりの春の草花、木々の花が一面を覆っています。自然の変化が実感できる、言葉通り春爛漫の時です。その中には可憐な花、華やかな花が入り交じっています。中でも、華やかさを堂々と放っている花と言えば、石楠花、牡丹、そして薔薇（ばら）をあげることができるのではないでしょうか？

　今回は、近隣で見たその中の２種の花にフォーカスしてみました。牡丹は中国の国花でもありますが、美と存在を全開させ自信に溢れた様には圧倒されます。石楠花は、山に咲く野生種が交配によって他種多様な品種がつくられ、公園や屋敷などに植えられています。４月から6月頃まで次々と咲く姿は、気品に溢れています。センスの良い女性に例えることができるでしょう。先号でも述べましたが、つつじと同種です。つつじが活発で人なつっこい若い女性に例えるならば、石楠花はつつじが知性と社会性を身につけた女性に成長した花と言えないでしょうか？（異論歓迎！）。

<http://sengawacx.com/LookNatureN05_2020.jpg>

　新型コロナが拡がり、多くの人が不安と苦しみという負の力に押されていますが、自然の中には様々な植物が生き生きと成長し、ある花は可憐に、ある花は華やかに開花します。そして、それぞれ命を次世代につないでいる営みが続いています。この自然の変化に目を向け、同じ自然の中に置かれている者として、自然界のすべての生き物に与えられている命（生命力）と知恵（科学）のパワーを全開させ、負の力をプラスの力に転換させ勝利しようではありませんか？

「近隣の自然の変化に目を向ける　No. 6

野の花を見よ Watch wild flowers」

2020年５月７日

「野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。 

しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。

今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　聖書 マタイによる福音書 6: 28-29

道端に咲く小さな野の花を見ると、

与えられた場所で精一杯生きていることに気づく。

他と比較して、羨むことも卑下もせず、

自分に与えられた生（花／容姿、葉や茎の高さ／外形）を大空に向かって開いている。

たとえ人から見られなくても、誉められなくても気にしない。

だから野の花は美しい。

神が野の花にも命を与え、養っている。

植物はみな神が創った自然の法則の中で生きている。

野の花がそれを知らなくても、生きている姿がそれを証ししている。

野の花はいつ人に踏まれ、刈り取られるか分からない。

大雨で根こそぎ流されるかも知れない。

でも、寿命（神から与えられた地上での命）として受け入れ、今を生きている。

寿命を全うした後には種を残す。そうして、次ぎの世代に命をつないでいく。

仮に半ばで命を失ったとしても、命を授けた愛の神は、一つひとつの野の花生涯を慈しみ

命の書にその名を記し、永遠の命を与えられる。

だから、今生きて困難に遭っても思い悩むことなく、今いる所で自分の生を精一杯生きよ。

その生き方は、比類なき知恵者で、権力と栄華を極めたソロモンも及ばない、

とイエスは言った。

なぜか？どの点を注意して見るとその答えがわかるのでしょうか？

１つは、添付する野の花の写真と野外の花を見て考えてみてください。

第２に、聖書マタイによる福音書6章30節以下を読んでみてください。

[http://sengawacx.com/LookNatureN06\_2020.jpg](http://sengawacx.com/%20LookNatureN06_2020.jpg)

「近隣の自然の変化に目を向ける　No. ７

鉄線・クレマチス＋珍しい花３点 Clematis and three rare flowers」

2020年５月9日

　政府は緊急事態宣言を１ヶ月延長しました。各都道府県は、感染実状に応じて外出・事業自粛を緩和する方針を打ち出していますが、東京は１ヶ月の延長を決めました。GW中、都民は8割が外出を控えることに協力し、感染者数の急上昇は抑えられたようですが、大都市故にここで「三密」厳守を緩めるとさらに長期化し、第二波の到来と重なり、最悪の状態になるのを恐れたのだと思われます。まったく手強くやっかいなウイルスです。

　すでに皆さんは、生活の中で感染予防を実行されていると思いますが、TVの番組だけでなくNHK、厚生省、東京都などの新型コロナウイルスの特設ページを開き、感染の実状・相談窓口・検査／入院などへの対応・行政府の方針・補償金の申請法・学校などの再開予定などをチェックし実際的な情報を得ておくと良いと思います（＊参考までに、主なウエブページを下にあげておきます。）

　市民として感染予防に心がけ、賢明でストレスを溜めず、体と心の健康を保ち、この時期を利用して新たな活動や学習などにチャレンジしてはどうでしょうか？それを分かち合うと体の中から新たな力が湧いてくるかもしれません。

　私は個人的に「身近な自然の変化に目を向ける」よう努めています。ちょうど春先なので草木が芽吹き、たくさんの花が次々と咲く季節なので、写真撮影対象には事欠きません。

実際、これまで1.5ヶ月間に数100枚の写真を撮りましたが、これまで気づかなかったダイナミックで多様な自然の変化に驚かされています。興奮(ストレスフリー)の毎日です。

　撮影は主に、朝の体操に出かける近くの芦花公園内と散歩中に見かけた花や草木ですが、写真アルバムを体操仲間にプリントして差し上げると癒やされる、和むと喜ばれ、撮影の励みとなっています。先日、老人ホームで働いている婦人に差し上げたところ、コロナで外出できないでいるホームの人たちがとても喜んでいるという報告を聞き、この活動（趣味）が生かされている事に喜び、感謝しています。聞くところでは、ホームの所長さんがカラー印刷をしていつでも見られるようにされていて、これまで作成した６枚のアルバムの中で、牡丹としゃくなげ(No. 5)が一番人気であったと言う。年配者はやはり、華やかで大きな花ほど元気になる、との考えを聞き、今回(No. 7)では, 鉄線（クレマチス）を取り上げることにしました。皆さまもお楽しみください。  
[http://sengawacx.com/LookNatureN07\_2020.jpg](http://sengawacx.com/%20LookNatureN07_2020.jpg)

**＊新型コロナ情報**  
１．厚労省「新型コロナウイルスに関するQ&A（一般の方向け）」：https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou\_iryou/dengue\_fever\_qa\_00001.html

２．NHK「特設サイト新型コロナウイルス」  
https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/

3. 日本経済新聞「新型コロナウイルス感染世界マップ」  
https://vdata.nikkei.com/newsgraphics/coronavirus-world-map/

4. 東京都庁「東京新型コロナウイルス感染症対策サイト」

https://stopcovid19.metro.tokyo.lg.jp

5. 日本バプテスト連盟関係

https://www.bapren.jp

https://www.facebook.com/pg/JBCallchurch/posts/

「近隣の自然の変化に目を向ける　No. ８:

風薫る、若葉は光と色を装い大空に開く

Fresh green with breezing in light and color 」

2020年５月13日

　今年は例年よりも早く若葉が芽生え、５月に入る頃には、芦花公園の木々（ケケヤキ、楠木、クヌギなど）が緑の葉に覆われていました。その中で、銀杏（イチョウ）は小さな葉がまばらに枝に付き始め、背後の青空が透けて見える姿が春の拡がりを告げているように感じる。やがて葉が大きくなり、緑に覆われていきます。しかし、後追いの木々は、緑だけでなく黄緑色のクヌギ、薄黄色の花散里、濃い赤紫色の葉を付けたレッドロビン、南天などが登場。園内はすっかり命溢れる豊かな自然の園へと変化していきます。

　そんな自然の変化を見ている中で、花に見間違う桃色の葉を付けた木と出会いました。木の名前が分からず、ネット検索したが出て来ない、諦めかけた時、薄黄色から脱色し緑の葉に変わる木が見つかった。葉の形を照合し、トウカエデ花散里と特定することができた（画像データの中に薄い赤みかかった葉を確認して結論）。しかし、桃色の新葉の写真はなかったので、もしかしたら本邦初かも？

　時は八十八夜、新茶の季節。静岡に暮らす高校時代の友人から今年も新茶が送られてきた。感謝。電話すると、今年は３月が温かかったせいか成長が早く、４月末には茶摘みが終えたと言う。公園内の茶も新葉が程よく伸び、摘み時であった。

　ここでは、木々が春の進行と共に変化する様子に注目したが、むろん同時に草花が次々と花を咲かせ、春を彩っています。人間社会とミクロな世界との闘いを知ってか知らずか、自然の美と安らぎと命の祭典が、５月の晴天下、華やかにダイナミックに展開中です。

[http://sengawacx.com/LookNatureN08\_2020.jpg](http://sengawacx.com/%20LookNatureN08_2020.jpg)

「近隣の自然の変化に目を向ける　No. ９

　 これぞ５月の花々 Here are May flowers」

2020年５月14日

5月と言えば思い浮かべる花は？と聞かれたら、何を挙げますか？前号では木々に目をむけましたので、今回は５月を代表する花々に目を向けることにします。

　先ず、カキツバタ、アヤメ、アイリスというファミリー。菖蒲も入れるべきかと思いますが、６月の花として登場予定です。尾形光琳のカキツバタの屏風絵が思い浮かびます。青空に映える青紫の花と地面からすらと伸びた葉との組み合わせが独特の美を生みだしています。

　次ぎにあげたのがスズラン（鈴蘭）。ドイツ名が５月の小さな鈴。可憐な少女をイメージさせます。しかし（だから？）、高貴なラン(蘭)科ではない？（これはランボウな意見／偏見）。そして、満開のシャクヤク。ボタンとならぶ優雅な花です。

　今では街路樹としてお馴染みのハナミズキ。白と赤の２種見かけますが、濃さの違う赤色の花があるので注目ください。そして、ハナミズキが終えた頃、遅くれて、ヤマボウシが咲く。花弁の形が尖っていて印象が違うが、実は兄弟（ミズキ科）。秋になる実のかたちも全く違う。ヤマボウシは木イチゴのような球形で、ハナミズキの実は青木の実に似ている。なお、ミズキは花が素朴で別種のようです。なお、ハナミズキはアメリカ産でワシントン州の州花。40数年前にシアトルで初めて見た時の記憶がよみがえる。

最後に５月の花としてフジ(藤)とベツレヘムの星も加えました。

[http://sengawacx.com/LookNatureN09\_2020.jpg](http://sengawacx.com/%20LookNatureN09_2020.jpg)

「近隣の自然の変化に目を向ける 番外編：

ミャンマー・ヤンゴンで見た花 Flowers in Yangon Myanmar」

2020年５月20日

　今年の３月に私は、ミャンマーに3/13から１週間渡航していた。日本のコロナ感染がクルーズ船「ダイヤモンド・ プリンセス号」だけでなく国内の感染者数が40人と危機が拡がりつつあった時期であったので、少々不安を覚えながら出発した。ヤンゴン空港に降り立つと２回、検疫（検温）を受けたが、無事に入国でき、予約していたTen Mile Hotelに宿泊。この時点でミャンマーでの感染者は０であったが、WHOがパンデミック宣言を出した直後であったため、政府は団体旅行者のホテルからの外出禁止を発令。私は個人旅行者であったので制限外であった。

　ところが、同じ時期に行われていたCFFスタディーツアー一行（安部さん、CFFスタッフ３人、キャンパー15人）は、コロナ規制の影響で別の狭いホテルから移動して来て、同宿者となった。当初の予定では２日間ほどキャンプに参加させていただき、それ以外の日は渡航の主目的であるヤンゴンの水問題プロジェクトに充てる予定であった。しかし結果的には、６日間同じホテルで過ごし、３度の食事、キャンプ プログラムに参加させて頂くなど密な対話・交流の機会を楽しませていただいた。その上、別れの日にメンバー全員から共通体験が楽しかったという望外の手作りカードを頂いた。

　彼らは、制約が多かったミャンマー滞在にも関わらず、帰国後、LINEで活発に交信を続け、ミャンマーの祭やスラムの実態などにについて調べてシェアするなど、キャンプ体験をポジティブに捉えている。そこで私も、何かシェアしたいと思いついたのが、ホテルの敷地内と周辺で撮った花の写真アルバム制作である。若者の一人が「花に興味があるけれど、語り合える人が周りにいない」と言うので、ホテルに庭に咲いていた花がプルメリアやブーゲンビリアだと教えると喜んでくれたことがアルバム作りの励みとなった。

　実は、ほとんどの花の名は不明であった。そこでPlantSnapというアプリとネットで検索。最終的に最後尾に載せた薄紫の花を除いてすべての名前が分かった。そのアルバムをキャンパーLINEにアップしたところ、直ぐに不明な花の名を教えてくれた。実は花弁の数が異なっていて正しくなかったが、交信しながら検索を続けていたところ、ずばり一致する花が見つかった。中国では有名な花のようだ。

　コロナ禍で世界中大きく揺れていても草木の花々は自然の営みを続け、人の心を癒やし、結びつけてくれる。写真アルバムを制作しながらそう想った。

［追記］：主目的の水問題プロジェクトの打ち合わせは成功裏に終え、3/18の帰国便に乗った。実は、それまでミャンマーの新型コロナ感染者が０であったが、3/23に初感染者が出た。以後、厳しい入国規制が布かれた。私の帰国便は予定通り成田空港に到着。検疫も通過、数日後から布かれた入国者の２週間の外出規制もなく帰宅できた。その後の国内外のコロナ感染の勢い、緊急事態宣言の下で外出自粛生活を振り返ると、何と奇跡的なミャンマー渡航であった事か！と思い、神に心から感謝している。

<http://sengawacx.com/MyanmarFlowers2020.jpg>

「近隣の自然の変化に目を向ける No. 10  
 バラ・薔薇の魅力はどこに Attractive points of roses」

2020年５月24日

　バラの魅力を語るのはおこがましく、何も書けずに困っている。でも、何でなんだろう？と自問した。私は、花の中で薔薇は別世界の存在と長い間思っていた。そのため本気でカメラを向けて来なかった。宮殿の庭に植えられ、毎日おかかえ植木職人によって大事に手入れされ、貴婦人たちが優雅に愛でている情景にまったく心惹かれなかったからか？世界中のバラ愛好家が人生をかけて品種改良を重ね、コンテストで栄誉を受け、特別な名が与えられたエリート花だからか？美しいものを美しいと言えないひねくれた感性を認めたくないからか？とにかく、私にとってバラは花でありながら花として存在しなかった。

　とは言え、春の神代植物園のバラ園を同窓生と巡り、埼玉で最大の伊奈バラ園を友人と訪れたことがある。そこで、西欧の宮廷史を飾った女性の名が付けられたバラのオンパレードに、また、大小様々なかたちと色、美しさの多様な姿に見入ってしまった。

　そして今、近隣を歩いていると、玄関先に手入れされたいろいろなバラが植えられていた。そこで改めてバラに魅力を感じ、カメラを向けて来た。その中で、コロナ禍の最中に咲いていたバラをアルバムに収めた。

<http://sengawacx.com/LookNatureN010_2020.jpg>

「近隣の自然の変化に目を向ける No.11  
 清廉で無限を想わせる白 White possibilities」　　2020年５月28日

白は無色か？科学的にはすべての色の光が合わさると白色となる。しかし、すべての色の絵の具を合わせると黒色になる。では青空に浮かぶ雲が白く見えるのはなぜか？（雨雲が暗黒に見えるワケと共に考えてみてください）。

　ここは白い花を紹介するアルバム：自然界で白い木の花を見た時、どんな印象を受けますか？白雲木は、白い雲を思い浮かべて命名されたに違いない。 真白なハンカチを思い浮かべ、そのまま命名されたのがハンカチの木。今年、世界中の人に尋ねたら、マスクの木と答えるかも知れません。

　空の木＝ウツギの空は、５月晴れの空ではなく、茎が中空になっているからというから空しい。でも日本原産で驚くほどの美しさで、多種多様のウツギが知られている。別名が卯の花。万葉集にも多く詠われている(ネット情報)。例えば「卯の花の咲く月立ちぬ 霍公鳥(ホトトギス) 来鳴き響(とよ)めよ 含みたりとも」。あれ、どこかで聞いたような？！

次は、白雲木によく似ているエゴノキ。よく見る純白と薄赤く化粧した種類も見た。コデマリは名まえの通りの可愛いらしい花。玉簾（すだれ）状に咲いた姿も美しい。ハゴロモジャスミンは道沿いの垣根を覆うように咲き、強烈な香りを放っているのですぐに気づく。ハリエンジュは、高木でたくさんの白い花の塊が枝を華やかに飾る。蝉はなぜかこの木を好んで羽化する。空ゼミが列を組んでいる姿が、芦花公園の夏の風物となっている。

<http://sengawacx.com/LookNatureN011_2020.jpg>

「近隣の自然の変化に目を向ける No.1２

　野生ラン(蘭)を探し求めて　Wild orchids」　　2020年6月3日

6月に入った。暦では春から夏に移り変わり、梅雨入りが近いようだ。しかし、今年はコロナ禍で季節感が薄れているのではないか？しかし、周囲の花々を見ていると、季節の変化は明らかだ。ホタルブクロはその典型。ゲンジボタルが光を放って飛び交うのは入梅の頃からで、昔は子どもが捕まえたホタルを筒形の花の中に入れほのかに光るのを楽しんだと言う。

でも、今年はホタル狩に行けるだろうか？先日そんな会話をした。可能性は、自粛／自由半々か？

　今回は、春先から探し求めた野生ランとの出会いについて記す。シュンラン（春蘭）、金蘭、銀蘭は例年よりも見事な花を付けていた。心躍る再会であった。紫蘭は、ランには珍しく園芸種として長い間たくさんの花を見ることができる。一方、白紫蘭とはなかなか出会う機会に恵まれなかった。エビネランは、かつては本橋野草苑で多様な花を見せていただいたが、今年は芦花公園の一角で見た３種だけであった。そのエビネの側に君子蘭が華やかに咲いていたが、実はラン科ではなくヒガンバナ科。ランになりたい思いが募り、ラン宮殿の君子と呼ばれるほどの美と鮮やかな色の花を付けるまでに出世した、という物語があるとかないとか・・・ランらんラン、と想像が膨らむのもランの魅力と言えるかも知れない。

　以上、今春のランとの私的出会いという視点で８種のランを紹介したが、過去に出会った野生ランについて付記する。世界中には多くの熱烈な蘭愛好家がおられ、毎年大規模な蘭展が開かれている。しかし私は、そこで展示される派手で高貴なランよりもむしろ野生ラン（高山植物や野草）に強く惹かれる。例えば、レブンアツモリ、クマガイソウはその中の別格だが、ネジバナ、マヤラン、サギソウ、ハクサンチドリなど、何度見ても大興奮する。

<http://sengawacx.com/LookNatureN012_2020.jpg>

<http://sengawacx.com/OtherWildOrchids.jpg>

［コロナ情報 ：緊急事態宣言解除後の生活］

参考：　緊急宣言後の生活062020C.pdf

<http://sengawacx.com/LifeAfterReleaseCOVID19Emergency.pdf>

「近隣の自然の変化に目を向ける　No.13  
 アジサイ(紫陽花)祭り Hydrangea Festival」　　2020年6月12日

6月に入り、周囲はアジサイ（紫陽花、八仙花、*Hydrangea macrophyll*a）が花盛り。そこで今回は、満を持してアジサイにフォーカスする。

　誰もが知っている「あじさい」とは、一体どんな意味があるのだろうか？ 調べてみた。「藍色が集まったもの」＝あづさい（集真藍）。「あづ」は小さいものの集まり、「さい」は「さあい＝真藍」とあった。紫陽花は当て字であった。なお、英語名の“hydro”=水、“angeion”=器である。そこで、梅雨にふさわしい花と考えるのは日本人で、シーボルトが紹介した欧州には雨期がないので早とちりしないように注意しよう。

　アジサイの原種は日本産のガクアジサイと言う。ちょっとビックリ。ノリウツギのようなヤマアジサイが交配されて多種多様な園芸種のアジサイが産まれ、今も量産されている。最近のヒット品種が、シチダンカ(七段花)であるとNHKの番組で知った。私が初めて見たアジサイだったので納得。

　今年見たいろいろな紫陽花（色違い、ガクアジサイ）を並べて見た。お好みのアジサイはどれですか？　カップを伏せた花が重なり集まって咲いている様が見慣れたアジサイだが、最近は新種のガクアジサイが増えているようだ。芦花公園にも新種で愉快な名のアジサイが通路沿いに植えられている。“春よ恋”　“エンドレスサマー” “ありがとう” “富士の湧水”などなど。

<http://sengawacx.com/LookNatureN013a_2020.jpg>

<http://sengawacx.com/LookNatureN013b_2020.jpg>

「近隣の自然の変化に目を向ける　No.14

6月の白い木の花　June white 」　　2020年6月19日

　5月(No.11）で特集した「清廉で無限を想わせる白 White possibility」では何色にも染まっていない清楚な花であったが、6月に出遭った白い木の花はどれも存在感があり、誇り高い花であった。

　先ず第一は、タイサンボク(泰山木）。大きな木に肉厚の白花を力強く空に向かって広げて咲く。誰もが見上げてしまう。しかし、下には向かない。次はクチナシ（山梔子）。純白の花を美しく広げ、強い香りを放つので、思わず目を向けさせられる。八重種もある。

　祇園精舎の鐘の音が響く寺院に咲くというサラソウジュ（沙羅双樹、別名、夏椿）。今では公園でも見られる。その小型版がヒメシャラ(姫沙羅）。沙羅は復活・再生を意味する命の木の一つとされている。

　カタルパは、芦花公園が誇る花の一つである。徳富蘆花が100数年前に入村した粕谷村に、熊本の徳富記念館から若木を移植されたもので、全国的にも珍しい木である。元々は、明治の始めに新島 襄がアメリカから持ち帰り、熊本の徳富蘇峰に贈った木（アメリカ キササゲ）から株分けされたもので、カタルパは英語名。かなりの高木になり、見事な花と細長いササゲ(大角豆)をつける。因みに、中国原産の**キササゲ**（木大角豆、学名：Catalpa ovata）は、花がやや小型である点が異なる。なお２年前に、芦花公園内にカタルパ保育園が開設された。

　赤い雄しべが特徴的なフェイジョア花はの純白でモコとしている（甘いので小鳥が摂食するとか）。その近くにチンシバイ（珍至梅）が大きな手を広げていた。よく見ると一つ一つの花が刺繍のように美しい。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　吉野 輝雄

<http://sengawacx.com/LookNatureN014_2020.jpg>

「自然広場から 近隣の自然の変化に目を向ける　No.15

6月も百花繚乱　Profusion of flowers in June 」2020年6月27日

　4,5月につづき6月も自然はまさに百花繚乱。被写体探しに苦労しないように蜂たちも花の周りを飛び交っている。花のかたち、色彩、香りも多種多様だ。個々の花の由来や特徴を知るのは後回しにし、自然を飾る多様な姿に目を向けて楽しみたい。

　今年、私が初めてみた花は、ペパーミントとミッキーマウスツリーとサボンソー。花もハッカの香りが強いのでマスクの内側に挟んで楽しんだ。黒い実がミッキーの耳？最近人気らしい。サボンソー＝シャボン草：花、葉、根など全体にサポニンを含み、昔、ヨーロッパでは洗たくに使われたと言う。アカンサスの長く伸びた花はいつ見ても不思議に思う。

ギリシアの国花で、古代ギリシアのコリント様式の建築に、アカンサスの葉が彫刻のモチーフとして使われた。上野の旧岩崎邸の内装にもアカンサスの葉が模様として使われているのを見たことがある。

<http://sengawacx.com/LookNatureN015_2020.jpg>

「自然広場から: 近隣の自然の変化に目を向ける　No.16  
 6月の二花展にて　Two Flower Exhibition in June」

2020年7月2日

　早7月、今日7/3は年間で一番日の入りが遅い日だ。すでに梅雨に入り、自然は大雨と強風が続いている。コロナ感染だけでなく熱中症にも気をつけなければならない。気温と気象情報（梅雨前線の位置）を調べてから一日を始めている。

　さて、6月を代表する２つの花展を楽しんだ。一つは花菖蒲。明治神宮や都立水元公園が有名だが､近隣の農家の畑で見事に咲いていた。水辺でもないのに、と不思議に思ったので調べてみると、日当たりでも水やりをして乾燥させなければきれいな花をつけるとあった。アヤメも同じようだ。  
　ホタルブクロとの出遭いは初夏の楽しみだ。今年も散歩道沿いに咲いてくれた。だが、白花とは出遭えなかった。その代わり、買い物に行く途中、藍色の大型の花が目に入った。驚喜して５枚パチリ。ゲンジボタルをフクロの中に入れてみたいものだ。

<http://sengawacx.com/LookNatureN016_2020.jpg>

今朝、芦花公園で四つ葉のクローバーを初めて見つけた。また、その近くにシンジュの木があり、昨夜の強風で花が地面に落ちていた、漢字名は？アコヤガイの中に真珠ができるように花の中に膨らみがあったので「真珠の木」と予想したが、実は「神樹」。出遭いは神の恵みと心から信じられた。



「自然広場から」「近隣の自然の変化に目を向ける　No.17  
 世田谷区花：サギ草/サギラン(鷺草/鷺蘭)展 Exhibition of Heron grass」

2020年7月10日

　近くの粕谷区民センターで開催中のサギ草展を見に行って来ました。感動を写真アルバムにして報告させていただきます。  
　サギ草は、野生蘭の一種で、まさに白サギが羽を広げたような姿の美しさと可憐さが最大の魅力です。サギが舞っているように見えました。世田谷の区花として保護され、区民が育てられた鉢植えのサギ草が展示されていました。心が洗われました。

<http://sengawacx.com/LookNatureNo17_2020.jpg>

［コロナ情報］

　東京都の新感染者数が224人(7/9)、243人 (7/10)、1週間で約1,000人！というニュースに衝撃を受けた。その理由についていろいろと論じられている；・緊急事態宣言の解除が早すぎた、電車の中、町の中には３月以前のように人々が密集している。・感染者数の約1/3に当たる20-30代の若者の行動（飲食店などでの「三蜜」）が増加の重大な原因、・感染経路不明者が多いのは、既に市中感染が広がっている事を示している、・感染者の増加はPCR検査件数が増えためで、数週間前と状況は変わらない、これからもっと増える等々。だれも正解を出せないのが新型コロナウイルスの特徴であり、怖さだ。

　外出制限が解除され、基本の注意/マナーを守りながら日常生活を送っているわたしたちですが、今どうすれば、“感染せず、感染させず、医療に従事されている方々に過剰負担をかけず、安心して生活できる日に早く戻る”ことができるのか？

　共に考え、協力することが肝心ですが、考えるヒントとなる材料を３つあげます。

① 基本的な注意（マナー）＜新しい生活様式：何度かこのコーナーで取り上げた＞を守る。教会では、礼拝で集まる上で決めたガイドラインを守ろう。

http://www.sengawac.com/July&laterWorship2020.pdf

② 感染リスクが高いところはどこか知り、日常の行動に注意する。

　（現状について注意を促している都立駒込病院の今村医師のコメント/7/10「 TV朝日・モーニングショー」からを参照）

③ 東京都が最近決めたモニタリング項目をチェック＜都内の感染状況と医療体制＞して生活する。

https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/iryo/kansen/monitoring.html

「自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.18」  
 多様なユリ（百合）咲き誇る(1)　Variety of Lilies 」

2020年7月17日

　都知事の名を挙げるまでもなく、日本女性には百合子の名が多い。百合が人々に愛されているからに違いない。でも、その理由は？昔は和服姿で歩く姿が山百合を思わせたからと思われる。現代では？白い百合の花言葉**「純潔」「威厳」（高貴）によるのかも知れない。花の色が違うと花言葉が違ってくるのも面白い（例えば、ピンク色は虚栄心、黄色は陽気）。**では、ユリの漢字がなぜ「百合」なのか？ユリの根が何枚もの鱗片が合わさっているから、ネット情報と教えてくれた。目に映る花の姿ではなく、地中で栄養を蓄えている根の姿に由来するとは。家族愛に溢れる母をイメージさせる。

　最近は、実に多様なユリが咲き誇っている、というのが私の印象だ。例えば、日比谷公園には色とりどりのユリ(２８種、１万２６００本余)が一面を覆っている。（https://www.youtube.com/watch?v=NkfdNkVeTbQ）。しかし、近隣を歩いているだけでも多様なユリに出遭える。ヤマユリ、オニユリ、テッポウユリは子ども時代から知っていたが、他の名前は知らず、スカシユリと一括りしていた。今回撮影したユリを調べると、日本原種以外に園芸種が多く作られていることが分かった。

　なお、ユリ科のノカンゾウ（野萱草 ）は素朴だが、その野生性が私は好きだ。

<http://sengawacx.com/LookNatureNo18a_2020.jpg>

<http://sengawacx.com/LookNatureNo18b_2020.jpg>

「自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.19  
 梅雨明けを待つ草花　Flowers waiting for the rainy season」

2020年7月25日

梅雨明けが待ち遠しいのは、大雨記録に苦しめられ、散歩もままならない私たち人間だけでなく、自然の変化に従順な草花も同じではないかと想像した。すると、夏を象徴する花・ヒマワリが一面

に咲く前に黄色の草花がいくつも咲いて夏へと案内しているようだ、と勝手に想った。さらに、ユリの並んで夏の到来を告げるハマユウ（浜木綿）の花が梅雨の最中に咲いていることに気づいた。梅雨明けはまだかまだかと首を伸ばしている草木も目に入って来た。

　とまあ、四季の変化、気温、雨、日照時間など自然のままに芽生え、成長し花を咲かせている植物の営みを戯れに解釈してみた。科学的根拠を全く欠いた説明だが、様々な草木が次々に花を咲かせ、心和ませてくれるので、ついそこに見えざる自然の法(役目)

の存在を感じてしまったのです（笑）。

　夏よ、来い！ コロナよ、鎮まれ！ 四季を楽しませてくれ！

　【コロナ情報】

　日本の感染者数が2.8万人を超えた(一日約1000人）。東京は一日200人超の感染が続き、グラフを見ると緊急事態宣言が出された頃の勢いだ。原因は何か？第２波か？検査数が増えた事による必然の結果か？10日以前は主な原因が夜の街の感染者で、症状の軽い（あるいは無症状の）若者が目立っていたが、最近は、40代以上の感染が増え、高齢者の数も増えつつある。問題は感染ルート不明が約半数を占める点だ。市中感染が拡がっている事を示すこの現実は正直、恐ろしい。政府主導のGO TO旅行がこの傾向を増幅させなければ良いが・・・。

　東京都民なので旅行する予定はないが、政府のコロナ禍対策に不安・不信を感じる。そんな中、外国の対策例（イスラエル、アメリカ・ニューヨーク市）がTV, 新聞で取り上げられていた。日本のコロナ対策の現状を客観視、課題を考えるための資料として引用する（添付ファイル参照）。なお、イスラエルの例と私見は次号で述べる。

<http://sengawacx.com/LookNatureNo19_2020.jpg>

「自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.2０  
 梅雨を謳歌するキノコたち　Mushroom lively in rainy season」

2020年8月3日

　長かった梅雨がやっと明けました。関東甲信越ではちょうど「水の日」8月１日でした。え？水の日？ご存知でしたか？認知度は３％なので、知らなくても水に流して下さい、とは言いたくありません。ぜひ覚えていただきたい。制定理由は？実は渇水危機に見舞われる8月に、水の大切さについて考え、節水を心がけるためです。今年のように異常な大雨で水害に遭われた方々の事を想うとピンと来ないかも知れませんが、水は生命を育み、人間の生活にとって無くてはならないものである事には変わりありません。世界的には21世紀は水不足の世紀と言われています。日本では、2014年に水循環基本法が制定され、具体的な実施計画づくりと実行が進められています。命と生活、自然環境と深く結びついている「水」問題にぜひ目を向けて下さい。今年の8/1は、リモート(ZOOM)でオープンセミナー「いま水を考える」に514人が参加して行われました。「水」に魅了されている私も参加しました。

　さて今回の主人公はキノコたち：人間や他の夏の草木と違って、長い梅雨を最も生き生きと過ごした生き物であったに違いない。芦花公園を歩いていると傘形、サルの腰掛け、風船形のキノコが目に入って来る。実は、キノコの名で知っているのは、松茸、椎茸、シメジ位なもので、検索した結果を写真に付けたが、確信がありません（お許しを）。

　でもキノコについて面白いことを新たに知った。キノコは菌類の一種で、カビのような微生物ではなく目に見えるサイズの菌([子実体](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AD%90%E5%AE%9F%E4%BD%93))であること、幼菌という成長中のキノコの存在、茸が語尾に付くのは、茂るように集まっている様に由来する等々。サルノコシカケは腐りかけた切り株に生え、幼菌期を過ぎると木の椅子ように固くなるという事実。何と、中国では霊芝として制がん作用などの薬効があるされ、珍重されているとか。食用のキノコ狩は、醍醐味と中毒の恐れが裏腹の、魅力と謎の深い存在のようだ。

【コロナ情報】

　イスラエルのコロナ対策例と私見を述べる予告をしましたので、朝日新聞の切り抜きを添付しますが、私見については見送ります（この１週間に、感染者が急激に増加し、日本の対策について専門家と政府・各行政において熱い議論が展開中なので、そちらに目を向け、外国の成功事例が可能となった理由、上手く行ってない事例を参考にして、これからの進路についてお考え下さい。）

<http://sengawacx.com/LookNatureNo20_2020.jpg>

「自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.21

夏、われらの季節！　Summer, our lively season」

2020年8月7日

先号では、ジメジメした梅雨の期間に生き生きしているキノコに目を向けたが、梅雨明けの強い夏の太陽を待っていた草花たちの登場である。高い空と雲、空気も一変した。8/3は満月でもあった。

　先ず、古代蓮（大賀ハス）。花のかたち、色が神々しい。葉の上には梅雨の後の水粒が乗っている。近隣の東覚院の境内に毎年見に行くのが楽しみにしているが、今年は最後の一花に出会えた。次のムクゲは、代表的な２色と珍しい八重。熱帯の花ハイビスカスと同じ仲間に分類されているが、やはり違って見える。韓国の国花（無窮花（ムグンファ）＝粘り強い花）であり、旧約聖書(雅歌)に出てくるシャロンのバラ。シャロンはイスラエルの地名で、旧約時代には神の約束の地と信じられていた。

　ウバユリ：芦花恒春園内に群生している。職員が種から育てられ、今では園の名物となっている。なぜ姥百合？「熟年（花期)を迎えて歯（葉）が無くなってしまった姥のようなユリ」など諸説ある。ミソハギ（禊萩）：萩の代わりに禊ぎ（水浴／神事）に使われたからと言う。別名、盆萩。夏にふさわしい花だ。  
　サルスベリ＝百日紅。名の由来：木肌がつるつるしているので、猿も木から落ちるだろう。夏の100日間も赤い花をつけるから（難しい漢字名の例）。最近、背の低い園芸種の百日紅を目にする。“夏&夏”中、花を咲かせるという英名。最後は、風船唐綿というフーセンカズラを思わせる珍しい木(アフリカ原産)。風船の中には綿毛が詰まっている。乳白色の花が美しい。

　ヒマワリはまだ若芽、朝顔、葵の花がすでに咲き始めている。つづきは次号で。

<http://sengawacx.com/LookNatureNo21_2020.jpg>

「自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.22  
 猛暑、昆虫たちが待ってた時！　Summer, time insects have been waiting」

2020年8月16日

連日35℃を超える猛暑が続いている。コロナ危機の高まりの中、熱中症にも要注意の日々にある。しかし、昆虫たちは、長い梅雨が過ぎるのをじっと耐え、8/1からの猛暑を歓迎、今を謳歌している。芦花公園内の自然の変化を見ていて気づかされた。

　最初の気づきは、セミの羽化。例年は、7月下旬になると次々に木々に羽化の最中の姿や、すでに終えた抜け殻が増えて行ったのだが、今年は、雨続きで地面から出てくることができずにいた。そのためか下草の間で羽化していたのを見てビックリ！可哀想に思ったが、梅雨明けと同時に次々と樹木の上で羽化し、アブラゼミだけでなくミンミンゼミも元気に鳴き出した。ハリエンジュ(ニセアカシア）の木を好んで羽化するのは例年と同じであった。Why?

いろいろな蝶も樹液を求めて飛来していた。瑠璃色の縞が美しい蝶、羽の一部が紫色の蝶を初めて見ることができた。２匹のスズメ蛾と出遭い、“衣装”のセンスの良さには驚き、蛾のイメージが変わった。樹液にスズメバチが３匹止まっていたのを見て、思わず身を引いた。刺されたら死ぬ恐れがあるからだ。地面のオオバコの花にはミツバチが何匹も飛び交っていた。１ヶ月前にラベンダーに多く飛来していたのを見て以来の事だ。コガネムシとカナブンは子どもの頃から馴染みの虫だが、なぜか見るとうれしくなる。

　今回、名称不明の虫に２匹出遭った。青い羽のハエか蜂と青白い尻の地蜂のような虫。

どなたか虫の名を教えて頂きたい。歩いていて、憎い蚊が腕に止まったので、カッと息をかけ手団扇したところ気絶した（喝(カ)采仮(カ)想物語）。

日照りの空を見上げたら、赤トンボがスイスイ飛んでいた。すでに8月半ば、秋が近い、と想う。

　暑さの中、どうぞお気をつけて！

<http://sengawacx.com/LookNatureNo22_2020.jpg>

「自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.23

われこそ真夏の花　Flowers in Midsummer 」

2020年8月22日

東京では8月に入り35℃を超える猛暑日数が10日に達した。日中外出すると熱風が体をつつみ、痛みを感じる。下旬になっても暑さはやわらがない、異常気象か？  
　昆虫だけでなく猛暑を謳歌している植物がある。何と言っても第一はヒマワリだ。20日前後に近隣を歩いていると既に咲き終え、首を垂れているのが目に入る。ところが、芦花公園では、背丈が低いヒマワリが３部咲き。？？：どうもコロナ禍で、小学生が種蒔きすることができず、花の丘ボランティアが矮性の種を蒔いたようだ。

**青色朝顔**にもいろいろな種類がある。色の濃さの違いだけでなく、曜白はアサガオとマルバアサガオの種間雑種として1976年に作られた珍しい(人気)の朝顔。琉球朝顔は、いくつもの青色の花と厚手の葉が密集して数メートルもの高さに伸ばし、昼間も逞しく咲き続けるところが日本朝顔と異なる。実は、西洋朝顔の大部分は青系統の色で、アオアサガオと呼ばれることがある。

**葵(アオイ)科**の芙蓉も夏を代表する花だ。ピンクの美しい花が数メートルの枝先に咲き揃う。白色は比較的少ない。面白いのは酔芙蓉。朝は花が純白だが、午後になると花弁が薄赤色になり、夕方には全体が赤に染まる。酒に酔って顔を赤らめていく様に似ている。写真の花弁を閉じた赤い部分は、二日酔い状態？　薄黄色の花のオクラも葵科で、実だけでなく花も食べられる。モミジ葵は花弁が離れている点が他の葵と異なる。

　グラジオラスは小さな剣を意味する花で、地面から並列に咲く花と共に伸びる葉の形が剣に似ていることから名付けられたと言う。

<http://sengawacx.com/LookNatureNo23_2020.jpg>

「自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.24

夏の名残り花　Morning glory festival 」

2020年9月5日

　カレンダーでは9月に入ったのに真夏日が続いている。実感としてはまだ夏の最中。

夏に咲く花々が今も見られる、その中でもいろいろなアサガオが次々に咲き、目を楽しませてくれている。

　そこで、先号に続き、朝顔まつり（アラカルト）をお届けすることにした。色、形、サイズの違うアサガオはどれも涼しげだ。それぞれに名前が付けられているハズと考えネット検索を試みたが、厳密な区分ではなく、マルバ…、ミニ…、西洋…などと分類されていることが分かったので、名前さがしを諦めた(私の理解力と追求不足かも知れない)。

　但し、３段目のアサガオは、それぞれ琉球朝顔、曜白朝顔（赤花）である（先号で曜日朝顔と紹介したが、本来は曜白＜花弁の境と縁が白色＞であったが、間違った名で広まってしまったと言う）。なお、桔梗は、万葉集で朝貌(あさがお)と詠まれたため、アサガオの一種と誤解されることがある。

　下段は、夏の花として親しまれている花々である。

<http://sengawacx.com/LookNatureNo24_2020.jpg>

「自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.25

夏季(６〜8月)の果実　Plant fruits of summer 」

2020年9月12日

春に花を咲かせた樹木が夏に実を結んでいる。中には、さらに数ヶ月後に実が熟し、私たちの味覚を通して秋を楽しませてくれる。

　目に入るのは、なんと言っても甘い実をつけた木である。フルーツというよりもベリー

(小さく多汁質で核をもたない果実）と言われるものだ。そのままでも甘酸っぱく美味しいが、ジャムに最適。近隣の農家が木イチゴ、ブルーベリーを直売していたので新鮮な実を味わうことができた。ジューンベリーは、アメリカサイフリボクという白い采配をイメージさせる花が4月に咲き、6月に実をつける。桑の実は子どもの頃よく摘んで食べた懐かしい実だ。芦花公園には山桃の木が何本もある。たくさんの実をつけるが誰も拾う人がない。薄味だからだろうが食することができる。山法師、犬枇杷(イヌビワ)の実も同様だ。しかし、砂糖とペクチンを加えれば立派なジャムになる（あまり人気がないが）。

　ハナミズキと山法師はミズキ科で５月頃咲くが実の形は全く違う。実はハナミズキの実は有毒なので要注意。

　イチジクの花がどんなだったか思い出せない。無花果?と思いながら調べると、微小な花が実の中に包み込まれていると言う。厚い皮に包まれた栗色の実を渡され、何？と訊かれた。ロンガン？果肉がないからノー。栃の木（マロニエ）だった実は、10年以上前に中の実と花にはドイツで出会い、思い出深い相手だった(＊1)。その名はホース カスタニエ（食べられないが、馬の飼料、リスの好物）。しかし、あく抜きすると栃餅となる。春先に咲くボケの花は、素直で可愛い少女を思わせるが、歯が立たない程固い実をつける。子どもの頃は、投石代わりだった。しかし、焼酎に漬けると梅酒に負けない味のリキュールとなる事を大人になって知った。

　下段は、非食用の実：椿（実から上質の油が得られる）、ムクロジ（石けんの元祖）。

イカめしに似たロウバイの実は、丸い青梅とは全く別種。ウメ科ではない。実には有毒物質が含まれているので要注意。花の甘い香りで新春を楽しませてくれた蠟梅は、その後どんな辛い時を送ってきたのだろうか？

　(＊1)　http://sengawacx.com/alster14.html

<http://sengawacx.com/LookNatureNo25_2020.jpg>

「自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.26

秋分の日の花　Flowers in autumnal equinox 」

2020年9月22日

今日9/22は秋分の日。昼間と夜の時間が同じ日で、暑かった夏が終わり、これから冬に向かって行く峠のような日である。今日の東京日の出と日の入りの時刻を知ってますか？５:29から17:38（12時間9分）←本当？ ９分の誤差が気になる方は確かめられたい。

　秋分の日は彼岸とも言われ、あちこちにヒガンバナが咲きそろう。明治の文豪・徳富蘆花が100余年前に晴耕雨読の生活をしていた芦花恒春園にも真っ赤な花（別名・曼珠沙華）が満開であった。最近、白や黄色のヒガンバナを見かける。さらに、ピンクや紅色で花弁がやや幅広い華やかな西洋ヒガンバナにも出会う。調べてみると、学名はすべてリコリス(Lycoris)で、同じ科であることが分かった。英語名はspider lily(花の周りに出ているヒゲが蜘蛛の足に見えるから）、cluster amaryllis（花がクラスターとなっているアマリリスの様）、hurricane lily（ハリケーン／台風の多い時期に咲くユリの様）、宗教と関係のない名で呼ばれている。

　秋分近くには多くの花が咲き、春とは違った佇まいの優雅で落ち着いた花々に出会え、心が癒やされる。今回はその中から３種、清楚な白色のタマスダレとガウラ（白鳥草）と薄ピンクのノウゼンカツラを取り上げる。

　次号では、万葉時代の「秋の七草」に注目したい。

<http://sengawacx.com/LookNatureNo26_2020.jpg>

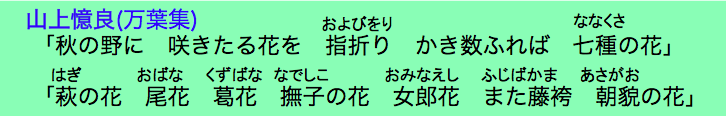
「自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.27

秋の七草　Seven autumnal flowers」

2020年9月28日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　吉野輝雄

秋の七草をすぐに言えますか？恥ずかしながら、私は言えませんでした。ネットで調べたところ、万葉集で山上憶良が詠んだ和歌に由来することが分かった。

  
　そこで、この７つの花を近隣で探してみようと思い立ち、今まで以上に目を凝らして歩き回った。アルバムの中の円内は、変種(西洋種、園芸種を含む）である。萩の変種は古来より知られていたものだ。パンパスグラス＝シロガネヨシは、背丈が大きく堂々としていてススキと同時期に見られる（変種ではない）。葛は、最近はほとんど刈り取られ、花を見つけるのに少々苦労した。ナデシコとフジバカマはすぐには見つからなかったのだが、幸いなことに昨日(9/27)、七草すべてに出会え、写真に収めることができた。「求めよ、さらば与えられる。捜せ、そうすれば見つかる」（聖書)を思い出した。

　ナデシコの正式名はカワラナデシコ。女子プロサッカーチームのニックネーム「ナデシコジャパン」は大和撫子(清楚で美しい日本女性)に由来する。ネット情報によると、西洋には300種ものナデシコが存在するという。平たい植木鉢に植えて玄関先に置かれた４株（円内の写真）はどれも西洋種であった。それでも芦花公園近くの家の庭先で出会えた時は嬉しかった。

　実は、カワラナデシコとフジバカマとキキョウ（万葉の時代には朝貌/アサガオと呼ばれていた）は数日前に仙川駅近くの家の垣根の外で撮影したものだ。家主は秋の七草を揃えて植えられたに違いない。他の４種はなかったが、家主の奥ゆかしさが表れているようで、頭を下げた。なお、八重とピンクのキキョウは園芸種で、芦花恒春園内に植えられていた。不思議な出会いをたくさん経験した秋の七草探しであった。

バックナンバー：

[http://sengawacx.com/](http://sengawacx.com/LookNatureNo27_2020.jpg)



「自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.28

秋なのに；秋なので　Despite autumn; it’s now autumn」

2020年10月10日

あの暑さがウソのように涼しくなった。秋分からもう20日も過ぎたのだから当然で、半袖姿では寒く感じる。周囲を見れば、秋なのに桜、ボケの花が咲いているではないか。初夏の花・待宵草、ブラシノキも。いわゆる“狂い咲き”？と思い、調べてみると、桜の方は、今が咲き時の十月桜（交配種で4月にも咲くと言う）。ボケもキンシバイも狂いではなく“返り咲き”であることが分かった。待宵草よりも小型の雌待宵草は開花期が9月迄とあったのでただの遅咲きか。尚、オーストラリア原産のブラシノキ、南国のブーゲンビリアが開花する理由は不明であった。朝顔は7〜10月迄咲くことが調査済みであったが、昼顔はじめ地面に這うように咲くマメ朝顔と仲間の羽衣ルコウソウ(学名に注目）に出会えた。

　秋なのに、と想うのは人間の身勝手で、草花たちは自然環境のしくみと気温変化に合わせ、けっこう逞しく生きている事実を見せられた感じだ。

　秋を象徴する花と言えば、コスモス、甘い芳香を放つ金木犀を挙げることができるだろう。実は、芦花公園の花の丘にはコスモス畑が２面あるのだが、なぜか9月中は早咲きの花が数本見られただけであった（10月に咲くかも不明）。その代わり、近隣には黄花コスモスが見事に咲いている。

　金木犀は、園内でも近隣でも、例年になく花が木全体を覆うほど豊かで、香りを周りに放っている。個人的には、香りを嗅ぐと高校時代の秋の文化祭を思い出す。一方、同時期に咲く銀木犀の香りは、澄んでいて上品な感じがする。ムラサキシキブが弓なりに深い紫色の実を垂れている姿は、その名の通り優雅で美しい。

<http://sengawacx.com/LookNatureNo28_2020.jpg>

「自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.29

秋半ばの自然を彩る花々　Flowers in the middle of autumn」

2020年10月22日

　雨の多い秋を迎えている。それでも晴れの日は、綿雲が青空に広がり季節の変化を実感させてくれている。10月神無月に目に映った花々のアルバムにしました。

　カンナが10月に咲くのはすっかり日本に馴染んだ証し？秋明菊は、その名の通り、穏やかで明るい印象を与える秋の花と言える。秋を個性的に彩るのがケイトウ。雄鶏の鶏冠や小動物のしっぽを想わせる姿はすぐに目に焼き付く。外来の花も秋に彩を添える。

　諺「蓼食う虫も好き好き」に出てくるタデは、背丈が2m近くになる目立つ花だが、この花が好きだという人をまだ知らない。でもイヌタデ、ミズヒキと同じ仲間(Persicaria) と知ると興味を惹かれる。まだ好きとは言えないが…。

　これまで見て来た花に動物の名（鶏・猫・狐・犬）が付いていて面白いと思った。それぞれ形に由来するようだが、冠名のイヌは植物学的に「否(いな)」という意味か、犬蓼のように葉に辛みがなく「役に立たない」という意味で付けられると言う。

　仙川沿いで都会では珍しいソバの花とシオンを見つけ歓喜した。早朝の気温が15℃を下回る日が多くなり秋の深まりを感じていたが、その徴であるホトトギス、茶の木の花が咲き始めている。

＊秋の七草の一つで、絶滅危惧種に指定されているフジバカマ(藤袴)がきれいに咲いている姿を、最近祖師谷公園で見つけた。No.27の画像を差し替えさせて頂いた。

<http://sengawacx.com/LookNatureNo29_2020.jpg>

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.30

秋の実に感謝（食用編）　Thanks for autumn fruits/nuts」

2020年10月30日

　　　　　　　　　吉野輝雄

味覚の秋という言葉は、芽を出した春以来成長してきた植物が秋に豊かな実を結び、それらを人間が自然の恵みとして収穫し、親しい人たちと共に味わう喜びと感謝が込められていると思う。自然の中でまさに自然に育ち結んだ実をいただくことで、人間も自然と共に生きていることを思う時であり、田圃の米作りやミカンや柿、ぶどうなどを果樹園で育てた農産物を収穫する時、そして、１年間の労苦が報われる時でもある。

　今号は、食用となる秋の実を取り上げる。まず柑橘類(Citrus)。近くの農家でミカン狩りをした。子どもの頃住んでいた浦和ではミカンがならず東海地方以南の地方が羨ましかったが、世田谷は北限である事を知って以来、楽しみにしていたミカン狩りだ。新鮮そのもので酸っぱさと香りが口の中に広がっておいしい！近くの庭先に九州の特産物だと思っていたブンタン（ザボン、英語名：ポメロ）が鈴なりになっていてビックリ。ユズは色づき始め、緑色の夏ミカンが日に日に大きくなっている。

　次は、ナッツ類（殻に包まれた食用の種実）。栗畑ではイガから実が弾け地面に落ちていた。芦花公園にはシイ(椎）、マテバシイの木が何本もあり、実が地面に落ちている。拾い集める人はほとんどいないが、そのまま（子どもの頃は歯で殻を割って食べた）か、炒るか、茹でれば食用可だ。カリンが今年は豊作だ。カリン酒は皮の芳香が抜群で、咳止めに効く。柿は種類が豊富で正式名を知らないものが多いが、甘柿の次郎柿、渋柿の蜂屋柿（干し柿にすると甘くなる）、豆柿は鑑賞用で、熟しても強烈な渋みに口が曲がる。

　稲は田圃に広がる垂穂を撮りたかったが近隣にはなかったので、近隣の庭先に鉢植していた稲穂をカメラに収め、収穫を待つ田圃を想像した。公園内には銀杏（イチョウ）の木は多く、毎年多くの人が拾い集めている。私も集め、あの臭いを全く嗅ぐことなく食用の実にまで処理した（＊処理法）。

ザクロを見かけることが少ないが、食べるところが僅かなザクロをかじった思い出は忘れない。最後はヘチマ。大きな黄色の花が次々と咲き、細長い実をつける。昔のようにタワシにするのだろうかと想っていたが、実は食用可であることを初めて知った。

　＊銀杏の処理法　http://sengawacx.com/HowGetGinko.pdf

<http://sengawacx.com/LookNatureNo30_2020.jpg>

次号では、食用ではない自然の草木の実を取り上げます。

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.31

「秋の実の音楽隊　Band of autumn fruits」

2020年11月12日

立冬(11/7)が過ぎ、秋が深まってきた。木々は命のサイクルの最終段階で実を付け、冬支度をしながら、次の世代に命を引き継ぐ営みをしているようだ。  
　地面にはいろいろな“どんぐり”(堅い皮をつけた実の総称）が落ちている。先号で食用の実をいくつか挙げたが、カシやクヌギの実は独楽や人形作りの材料として拾い集めた事が懐かしい。松ぼっくりは、松の実が弾けた後の殻だが、よく見ると、その美しい形状に感動する。ところで、堅い実のクイズ３題にすぐに答えられますか？(②は超難問）。

　やはり赤い実には目が向き、いろいろと想像が湧いてくる。イイギリは、高い木の枝にぶどう房のようにたくさんの実をつけるクリスマスツリーのような樹木だ。ソヨゴ（冬青）はその名のとおり、真冬でも緑の葉、赤い実が凛としている。サネカズラ(実葛)は芦花公園の知られざる名物で、春に咲いた白い花が5ヶ月余かけて実を結び、赤い粒で囲まれたかんざし(簪)を思わせる実に成長する。サンゴジュは、陸の赤珊瑚のようだ。モチノキからは、緑の葉と真っ赤な実から自信と強い個性が伝わってくる。しかし、ピラカンサからは（赤い小鳥も食べに来ない)どうしてか何も想像が湧き出て来ない(ゴメン）。

　槇の木の実はユニークだ。２連ダンゴの様な実を他では見たことがない。モッコクは代表的な庭木で、実は野鳥が食べる、という。花の香りがセッコク蘭に似ていることから命名された。カンレンボクの中心から球状に伸びた実は、花と見違える。英名はHappy tree。ブローチに使えそうだ。地面に落ちた紅葉葉フウ(楓)は、小さなハリネズミが群がっているように見える。銀スプレーを吹き付けると立派は飾り物となる。アオギリの実は一粒の種を乗せた小舟のようで、一度見たら忘れない。写真は枯れた実の群れが落ちずにいる姿。カタルパは、新島襄が100数年前に徳富蘇峰・蘆花兄弟にアメリカみやげとして贈った若木の孫木。インゲンのように細長いササゲ(大角豆)が垂れ下がっている。ヤマイモの実(天狗の鼻)を見つけた時には、鼻筋に付けて遊んだ子ども時代を思い出した。

　シマトリネコの名が分かるまでネット検索を繰り返した。結局、短冊のような実をつける木と入力した時にヒットした。シマ＝沖縄原産で暑さに強く寒さに弱いが、庭木として人気がある、という（実際、近隣の庭木として目にした）。サルスベリ(百日紅)は、夏中花を咲かせた後、立派な実をつける。地球温暖化に耐え抜く木の一つになりそうだ。

　ノシランは草の実の一つで、今は黒に近い色だが、これから竜の目のような深い青色に変化する。洋種(アメリカ原産)ヤマゴボウも子どもの頃の遊び材料で、ぶどうのような濃い赤紫色の汁をインクとして絵を描いていた。しかし、服に付くと色が抜けず、後悔した。

秋の実は実に多種多様で、色・形・香・味にそれぞれ特徴があり、食用であれば秋の味覚として、ドングリであれば子ども時代、自然の中の遊んだ思い出を残す。そこから私は、吹奏楽の楽器が奏で心に響く音楽隊をイメージさせられた。

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.32

「見る　菊(きく)　楽しむ　Watch Chrysanthemum Enjoy」

2020年11月19日

毎年11月になると、菊花の愛好家が長い間丹精込めて育てた大菊をコミュニティーセンターや自分の家の前に並べる。寒さが増す時期だが、見事な大菊の鉢が何列にも並べられているのを見ると、その豪華さに目を見張らされ、寒さを忘れる。

　今年はどうか？近くの粕谷区民センターの庭に徳富蘆花夫妻の菊人形と共に配置される菊囲いの小屋がない。コロナ禍のせいだ。しかし、建物の前にいくつか大菊、中菊が展示されていた。

［参照］2017年の菊祭り／粕谷区民センターの写真アルバム

　http://sengawacx.com/Chrysanthemum2017.pdf

　近隣を歩いていると様々な菊が目に入ってくる。名前を調べようとネット検索をしたが、なぜか菊には固有名がないことが分かった。大菊(厚物、管物）、中菊、小菊、野生菊と分類され、そこに花の色や形状を付記している。また、西洋菊、古典(江戸)菊と由来で分類している。あまりにも多様で、新たな改良種が次々につくり出されるためか？  
　そんなワケで、アルバムには花の名をつけていない。ただ、野菊の花は小説にも使われている名なので書き添えてある。

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.33

「明るい晩秋の花々　Bright flowers in deep autumn」

2020年11月26日

秋が深まって来た。日の出が6時半近くとなり、寒さが増し、外出にはヤッケ・手袋が欠かせない。自然に人は体も心も縮みがちだが、野の花たちは命を謳歌しているかのように明るく溌剌としている。  
　竹でも木でもないのにどこまで高く茎が伸びていくのだろうと眺めていると、ある日美しい薄紫の花を咲かせる。その名は皇帝ダリア。背の高さは２m以上、茎は太いのだが強風で簡単に折れることがある。促成の帝国が短命なのと同じ自然の理か？　一方、ツワブキ(石蕗)は端正な黄色の花を毎年確実に咲かせる。つやのある蕗の葉は食用になる。

エンジェルトランペット：天使がトランペットを吹き鳴らし、救い主キリストの誕生を祝っている情景が思い浮かぶ、と言う人はクリスチャンだけか？大会の開会を告げるトランペットを連想する人の方が多いのではないか。初夏にも咲き、黄色や薄紅色の花もある。いずれにしても笛の音が明るく鳴り響き、人々の気分を盛り上げている情景が目に浮かぶ。

サフラン：春先に咲くクロッカスの仲間。乾燥させた雌しべは、スパイス兼ハーブとして用いられ、パエリアなど料理を黄色に色づけするためにも使われる。因みに、葉が全くない薄赤紫のイヌサフランが10月半ばに咲いていた。

マンデビラ：美しい花だ。赤、ピンクの花が多く、白は珍しいようだ。蔓(つる)性の植物が次々と花を咲かせ、長持ちするので人気がある。

コキア（ほうき草）：赤い綿ボールが丘を埋め尽くした国立ひたち海浜公園のコキアの光景が多くの人々を魅了している様子が度々TVで放送され、一般に知られるようになった。昔は、ほうきを作る材料として農家の畑の角に植えられていた。

　サルビアはセイジとも呼ばれ、数百種も存在すると言う。短い赤首の花をつけるサルビア(Salvia splendens)がよく知られていたが、最近では写真のような青、赤の首長のサルビアも見かける。シクラメン、ジンジャーも今や特別な花ではなく、公園や一般家庭の庭で見ることができる。なお、花弁の小さなガーデン(ミニ)シクラメンは、冬でも野外でも育てられるので人気がある。

-----------------------------------------------------------------------

● バックナンバー（写真が拡大表示される）

http://sengawacx.com/

-----------------------------------------------------------------------

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.34

「紅葉、黄葉の季節　Season of red and yellow leaves」

2020年12月12日

　今年の紅葉は例年よりも遅い感じがするが、12月中旬に入ると日に日に赤・黄色の葉の色が鮮やかになって来た。とりわけ、芦花恒春園内の紅葉が美しい。イチョウの黄葉はすでにピークを過ぎ、落葉が地を埋めている。これまた美しく、日の出、日の入りが遅くなり、寒さが増し、おまけにコロナの感染が拡大している時であるが、黄色のジュータンと多様な色とかたちの落葉に心が慰められている（次号は、落葉を特集する予定）。

　公園外では、カエデやドウダンツツジが見事な色・形で迎えてくれている。今年はじめて気づかされたことがある。高木のユリの木がてっぺんまでオレンジ色に染まった堂々とした姿と世田谷自動車教習場内のケヤキの大木が見事に赤く染まったことだ。

　今、私どもはコロナ禍の中で心揺れているが、悠久の時を経てきた木々はまったく揺らぐことなく、与えられた命のサイクルを見せてくれた。泰然とした自然の営みに倣い、心静めてクリスマス、新年を迎えたいと思う。

-----------------------------------------------------------------------

● バックナンバー（写真が拡大表示されます）

http://sengawacx.com/

-----------------------------------------------------------------------

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　番外

「冬至の朝　Winter solstice morning」

2020年12月21日

　今日12/21は冬至（１年で最も昼の時間が短い日）。芦花公園（世田谷）に朝の体操に出かける時は暗く、寒い。６;00に天気情報を見ると0℃、日の出は6:47、日の入りは16:32。今日は、言わば１年間で最も暗いどん底にいる日と言える。これから段々明るく、暖かくなるハズだが、実際にはこれから１ヶ月の間、日の出時刻はほとんど変わらない。気温はもっと下がっていく。そこで、「しばらく朝出は止めて、冬眠に入ります」と宣言する人もいるのも理解できる。しかし私は、暗闇にめげず朝起きし、行動し続けると迎える春が眩しく、温か感じられることをこれまで体験して来た。だから体操仲間と「上を向〜いて」頑張ろうと励まし合っている。

　先日、目を上げると、まだ暗い空に明けの明星（金星）と月が光っていた。その数日前の月は「明けの三日月」( 28日の月）であった。また、日の出に最も低い角度から上がる太陽は、公園の木々の間を抜けて落ち葉の大地に光の帯を伸ばしていた。周囲が明るくなると、紅葉が光を受けて輝き、日々異なる形の雲が青空にたなびいていた。

　今年12/6には、６年前に火星と木星の間に存在する小惑星の一つリュウグウに向けて旅立った探査機「やぶさ２」のカプセルが無事帰還した。採取した岩・砂のサンプルを分析すると、地球生命の起源を解明できるかも知れないという明るいニュースは、専門家だけでなく皆が感動し、希望を与えてくれた。

https://media.dglab.com/2020/12/06-afp-01-3/

　一方地上では、いま全世界がコロナウイルスの襲撃に脅かされ、奮闘している。自然の営みは、天でも空・地でも常に変化し、互いに影響を与え続け、悠々とそれぞれの営みを続けている。その壮大で厳粛は事象を見ながら日々を送るよう努めると、自然に気持ちと視野が広がり、コロナ渦への向き合い方が少し変わってくるのではないだろうか。

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.34ｂ（補）

「紅葉(こうよう)の徳富蘆花旧宅　Roka house in fall leaves」

2020年12月1６日

　前号の追補版。先号を配信した後に徳富蘆花旧宅の庭（芦花恒春園）の中と周囲の木々の紅葉がさらに進み、公園内とはまた別の美しさに感動させられたので、追補号を制作した。解説は不要かと思うが、１つは、紅葉・黄葉と緑の葉の椿や竹林とのコントラストが鮮やかに目に映った。また、銀杏の葉が絨毯のように地面を覆った景色は、この時期ならではの絶景？と毎年思う。欅（ケヤキ）の葉は、オレンジ色に染まるものが多いが、黄色の種類もあって、濃い緑の葉や黒い幹が背景となると美しさが格別だ。



-----------------------------------------------------------------------

● バックナンバー（写真が拡大表示されます）

http://sengawacx.com/

-----------------------------------------------------------------------

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.35

「年明けの天地の様は？　How’s Heaven and Earth in the new year? 」

2021年1月15日

年が明けてすでに半月が過ぎてしまいました。新年の挨拶、コロナの爆発的感染拡大、２度目の緊急事態宣言への対応に追われていましたが、外出自粛で時間ができましので、今年最初の号を作成しました。

（なお、年賀状の付録/写真をHPリストに載せていますので、よろしければご覧下さい）。

　関東地方は年明けから８日間快晴つづきの毎日でしたが、日本海側では記録的な豪雪に見舞われています。昨年夏の猛暑、巨大台風、豪雨を思い起こすと、ウイルスの猛威に振り回されている人間社会だけでなく自然界も異変が起こっているのではないかと心配になりませんか？  
  
　そこで、“天”と地の変化に目を向けてみた。夜明けの空には明けの月(26日の月）近くに３つの星が見えた。天文情報を調べると、木星、土星、水星が大接近するとあった。しかし、1/10の夕刻に観測された報告ばかり（天文好きは夜型人間？)。星の特定は見送り。

　冬至以後、日の出は6:51になり20日余り変わらなかった。暗く寒い日が続くので、それだけ明るい春が待ち遠しく思う。北欧の人びとの気持ちを想像する。

　お正月の花：縁起の良いセンリョウ(千両)、水仙（花言葉・尊敬）、紅梅（優美）,

セリ（芹）は春の七草の一つで、七草粥の食材。残念ながら、すずしろ(大根)以外の５

草は見つからなかった。

　新年に入り氷点下の朝が数日あった。寒冷の中でも逞しく咲く花：甘い香りのロウバイ(蠟梅)、パンジーは霜が降りても雪の中でも春まで花を咲かせる不思議な花だ。芦花公園の花の丘を飾っている。冬を越す白バラにも出会った。

　1/12の午後、今年最初の雨。待ちに待っていたお湿りだ。人間にとってはコロナ感染リスクの低下、虫や植物たちには渇きを潤す水補給の時。翌朝の気温は氷点下。予期した通り、草木の葉の表をうっすらと霜が覆い、見慣れた葉が一変、興奮しながら撮影した。

　今年もどうぞよろしくお付き合いください。

-----------------------------------------------------------------------

● バックナンバー（写真が拡大表示されます）

http://sengawacx.com/

-----------------------------------------------------------------------

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.3６

「冬来りなば春遠からじ　If Winter comes, can Spring be far behind? 」

2021年1月31日

　今日は1月最後の日。月末に積雪があり、翌朝は厳寒の空に満月が煌々と輝き、地面には霜柱が立っていた。冬の真っ直中だが、暦の上では節分が近い。そこで、早咲きのセツブン草が見れるか近隣の本橋野草苑を訪ねた。咲いていた。但し、開花していたのはまだ1/10以下。震える手だカメラに収める。  
　庭に目を移すと、雪を押し分けて咲く早春の花・スノードロップ（松雪草）と雪割草が蕾を開こうとしていた。節分＝立春(今年は2/2）の入口前に立った気分であった。  
庭には、真冬に実を結ぶ木・万両、千両、百両が揃って鮮やかな実を付けていた。また、冬を彩る花・椿が何種類も咲いていた。後に、山茶花と椿の花を特集する予定なので、ここでは、本橋さんが大事に育てている３種の椿（侘助椿と笑顔椿）と芦花公園内の藪椿の花を紹介する。

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.37

「立春に咲く花　Flowers blooming first day of spring 」

2021年2月11日

　節分の翌日は暦の上で立春、春の域に入ったことになる。この時を万人に告げるかのように満を持して花開くのが日本原産の満作(まず咲く)、同時に隣国の中国原産も咲く。続いて福寿草が春を祝福するように地面から顔を出した。さらに遠慮がちに咲いていた白梅と紅梅が枝の先まで優雅に咲きそろっていた。そして、立春の決定的な証拠であるフキノトウが芽を出した。雪が残る山間地方では、雪解け水のかたわらで薄緑色の葉と芽を出すフキノトウの姿が春の到来の証しと言われているが、晴天つづきの東京の地面でも負けず嫌いの株が芽を出したのかも知れない。しかし、好物の天ぷらにして春を味わうにはあと１ヶ月待たねばならない。

　季節外れと思われる花に出会った。アヤメ（菖蒲）は初夏の花なのに、立春に目に入った。実は、寒咲菖蒲（別名：ウインターアイリス）として知られた品種。ツルニチニチソウも同様で、初夏には蔓(つる) が地面を覆い、鮮やかな青い花が咲く。ボケの花が一輪だけで枝に出現。これも春の徴しだ。咲き揃う３月半ば過ぎまで待つことにしよう。

エッまさか、と思ったのがフリージア。開花時期はネットでも３〜５月。部屋の中で育てたためか？

　今号のハイライトは、レンテンローズ。直訳すると、「レント（受難節）のバラ（実はキンポウゲ科の花）」。受難節は、教会暦によりキリストの受難（十字架の死）と復活を覚えるまでの期間と定められている。今年は2/17から４/2の受難日、4/4の復活祭(イースター)に当たる。

**レンテンローズは、**学名ヘレボルス・オリエンタリスの英語名で、レントの時期に咲く花として親しまれており、多様な形、色の種類が知られている。なお、冬咲きで白色のクリスマスローズはその園芸種で、ヘレボルス・ニゲル(*Helleborus* niger)が正式名。特に日本で人気の花で、日本クリスマスローズ協会が結成され、今年も神代植物公園で展示会を開いている。

-----------------------------------------------------------------------

● バックナンバー（写真が拡大表示されます）

http://sengawacx.com/

-----------------------------------------------------------------------

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.38

「冬の実・柑橘類など　 Winter fruits such as citrus」

2021年2月16日

世田谷でこんなにも多様な柑橘類があるとは！ミカン栽培の北限外の浦和生まれの私には驚きであり、憧れに思っていた所だ。八百屋の店先で買えるミカンの大部分は温州ミカンだが、近隣の川本農園ミカン畑には清美ミカン、ポンカンもあった。もぎたて特有の酸っぱい味と香りに魅せられ毎週通った。ダイダイ(橙)はお正月の鏡餅の上に飾られているのを見ていたが、近隣の本橋家の庭には縞ダイダイと共に生えていた。食用には適せず、酸味の強い果汁は風味が良いことからポン酢に使われるという。なお、夏ミカンの本名は夏橙、酸っぱいワケだ。

　キンカンには、小さなラグビーボールの形の金柑とは別にやや大きく靨(えくぼ)の付いた福寿金柑があることをはじめて知った。今年はコロナ禍のせいか、宮崎産の金柑“たまたま”が比較的安かったので、何回も買って味わった。

　ユズ、レモン、カボスは、香りと酸味が持ち味の柑橘類は天然の調味料として食卓を豊かにしてくれる。三種とも近隣の庭からいただき賞味することができた。ユズは果皮ごと薄く輪切りにして砂糖や蜂蜜に漬け込むと、香りと甘酸っぱ味がたまらない。マイヤーレモンは薄橙色で、店先で売られている黄色いレモンとは香り(芳香)が異なる。レモンとオレンジとを交配させたミカン属の柑橘類である。カボスは大分産が97%で、徳島産のスダチと薬味、酸味を競い合っている。どちらも旬は緑色だが、カボスの方がやや大きい。近隣の庭で黄色の果実を収穫している人を見かけたので、柚子ですか？と声をかけたところ、カボスという答え。話が弾み、分けて頂きたいと頼むと、10数個タダで下さった。なお、カボスの使い方は、大分県振興協会のウエブページなどに詳しい（ http://www.oitakabosu.com/dish/)。

　下段は冬の実：南天（赤と黄実）。“難を転じる”、と縁起の良い庭木とされて来た。葉が、お赤飯に添えられるのも同じ習わし。赤い実は咳止め効果があると言われ、子どもの頃煎じて飲まされたことがある。黄実は珍しいが、赤実の園芸種。

　青木の光沢のある赤い実は、真冬でも濃い緑の葉と調和して映える。2月初め、ムクロジ（無患子）の葉は全て落ち、実の房だけがいくつも枝先に付いている。落下を待ってもなかなか落ちない。数個落ちたアメ色の実の皮は、学名のシャボンが示す通り、砕いて水の中でかき混ぜると泡立ち、昔は洗濯・洗髪に使われていた（石けんの元祖）。皮の中には固い黒い玉。羽子板の羽付きの球としてお馴染みだ。

　おまけは、クチナシの実。初夏に一重の真っ白な香り高い花を咲かせる。冬になって鮮やかな橙色の実を結ぶ。キントンを黄色に仕上げるために用いられる。

-----------------------------------------------------------------------

● バックナンバー　　 http://sengawacx.com/

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.39

「サザンカとツバキ　 *Camellia sasannca & japonica*」

2021年2月28日

　椿は縄文時代からあったと言われ、万葉集に詠われている日本を代表する花の一つだ。大島椿はヤブツバキとして有名で、学名*Camellia japonica*からも伺える。さらに、江戸末期にシーボルトが日本滞在中に多くの植物を観察・採取した成果を絵師の精密画付きの大冊「日本植物誌」(Flora Japonica)の中で特別扱いしている。彼は、持ち帰った種を欧州各地に広げ、日本の花として親しまれている事実がある。私は、2000年にオランダで学会があった時、ライデン大学に保管されている「日本植物誌」の原本を見に行ったことがある。中を開いて見るだけでなく写真に撮ることが許された。その時の感激は今も忘れられない。

*Camelliaは、*日本に自生している藪ツバキ（いわゆる椿）と雪ツバキ(北方に適応した椿）、サザンカ(山茶花)３つの同族名。因みに、シーボルトの本の花には*Camellia sasannca*と記されている。なお、茶の木*Camellia sinensis*も類型である事から “山茶花”名が生まれたのかも知れない(推測)。

　椿と山茶花の違いは？どこで見分けられるのか？見分け方がネットに載っているが、実際には難しい！確かなポイントの一つは開花時期：10月半ばから咲き始めるのがサザンカ(S)。椿(J)は年明けから様々な形の花が咲き出す。しかし、両者とも一重と八重の花が存在し、混在する時期があるので判別に苦労する。

　厳密な判別法に興味のある方にネット情報を要約してお伝えすると、a. 花の散り方: Jは花首から落ちる、Sは花びらが散る。b. 形：Jはやや筒状で厚みがある、Sは平面的で薄い。c. 葉脈：Jの中心はクリア、Sの中心は黒ぽい。d. 葉：Jは鋸歯が浅い、Sは鋸歯がある。e. 歯の裏側：Jには毛がない、Sには毛がある。

　個人的にはJ, S判別に実際的な意味があるのか疑問を感じる。その理由は、親株のCamelliaからが気候や土地の特性に適応するために変異した同族種に過ぎないと思うからだ。さらに、人為的に相互に掛け合わせ（交配）した膨大な数の新種がつくられ、それぞれニックネームが付けられている現実があり、類似点が多く区別が困難（素人には）であると感じたからだ。

　　ツバキ画像索引　花色・花形別一覧

　　　 http://www.nagominoniwa.net/list/list-top.html

サザンカ現存品種名一覧

　　　http://talk-to-oneself.oops.jp/sazannkahinnshu/hinnshu1.htm

この一覧は、Camelliaの多様性と日本人がいかに椿、山茶花を愛しているかを示す資料であると思う。

　この度、撮影した花の名前を調べるために上の一覧のお世話になったが、最後まで確信できなかった花がある（間違っていたらお知らせいただければ、お詫びして直ちに訂正します。）

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.40

「早春の花々は春足だ！　 *How fast early spring flowers are！*」

2021年3月10日

３月に入り、「アッ、春の花が咲き始めたナ」と心弾む思いで道を歩いていたら、数日後には次々と春の花々が咲き出し、目をひらけば周囲を飾っている。まさに俊足、これぞ春足？ボーと春眠をむさぼってんじゃねーよ！」とテコちゃんに叱られた。

　早春を代表する花と言えば、やはりクロッカス？。春の蘭（シュンラン）は例年よりも１ヶ月早く咲いたので驚いた。黄金色の花が印象的な立金花。はじめて見たのは、50年前の5月末の尾瀬ヶ原。遅い雪に見舞われたが、山の早春時だったのだろう。

　水仙は１月から咲いていたが、３月になると様々な水仙が地面を飾るようになった。大きく分類すると、ラッパとニホン ズイセン属に分けられるが、色、形が異なる水仙が存在する。学名は、ギリシャ神話のナルシソス（自己愛）に由来し、中央に紅色の輪郭がある口紅水仙が彼の生まれ変わりとされている。

　ボケは、花名の響きとは大違い、春の到来を盛り上げている魅力ある花だ。花が枝を隠すほど集合して咲く種類もあるが、華やか過ぎて魅力を下げている嫌いがある。沈丁花は春の香りを振りまいているようで、春の演出には不可欠な花だと思う。

　木の先に真っ白な花を青空に手を広げたように咲くモクレン(木蓮)とコブシ(辛夷)も早春を飾る花と言えるだろう。では、その違いは？木蓮は花びらを包むようにして咲き、その数は９枚、辛夷は花びらを広げて咲き、数は６枚。どちらも傷つきやすく、強風に当たると傷跡が茶色になる。今年は春の風が穏やかで、美しい花を長い間楽しませてくれている。

　サンシュユも典型的な早春の花で、卒業式の時期が満開という印象が脳に焼き付いている。しかし、今年はなぜか、かなり早い。宮崎県民謡「ひえつき節」を思い出す人は？　日本人の生活と伝統を大事にしている渋い人だ、と想う。

　枝垂れ尾のように咲くアセビの登場もあっと言う間であった。学名から日本原産と分かる。なんと英名はJapanese Andromeda(エチオピアの女王の名）。馬が有毒の葉を食べて酔った様になったという和名よりも興味深い。

-----------------------------------------------------------------------

● バックナンバー　　 http://sengawacx.com/

■ 緊急事態宣言が3/21まで延長されていますので、感染予防の基本を守り、外出を自粛されている方が多いと思います。しかし、季節はすでに春に変わり、春の花々が次々に咲いています。人手の少ない公園や広場、また道端に春の花を見つけると、きっと自然の変化が感じられ、心が和み、癒やされるはずです。長く忍耐の生活を続けて来たために感性が鈍っているかも知れませんので、密を避け、基本マナーを守って早春の息吹を感じてみてはどうでしょうか。

東京のコロナ感染者は300人を前後しているため、油断していると再上昇（リバウンド）し、高い第４波を引き起こす恐れがありますので、ここは忍耐（辛抱）の時かと思います。ワクチン接種が広く実施され、感染力の大きく、死亡率を高めるコロナウイルス変異株による感染を抑えることがこれからの基本要件かと思います（筆者の私見）。

「野川散歩で 自然の変化に触れる」 (番外編)

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2021年3月

　早春の晴天の午後、久しぶりで野川岸を散歩した。大沢橋近くは川の水が豊富でコサギが餌を探していたが、上流の野川公園近くは一部流れが涸れていた。しかし、国分寺崖線からは湧水がわずかながら流れ出ているのが確認できて嬉しかった。

　水車小屋も健在であったが、コロナのために休館となっていた。川辺には早春の野の花が見られたので、カメラを向けながら歩き、野川公園の自然観察園に入った。さすがに木道沿いには冬の名残が感じられたが、ケマン草、踊り子草が一論だけ咲いているのが分かり春の到来を確認できた。

　今日の一番の目的地は観察園の一角：いきなりミスミソウが数株目に入り、側にアズマイチゲが咲いていた。来たかいがあった！ 節分草はすでに花期が過ぎていたが、6年前に数株移植されて根付くか心配していたのがなんと数百株に増えていた。

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.41

「団子が先か 桜見が先か？ Dumpling or cherry blossom?」

2021年3月24日

今年の桜の開花も春速でやって来た（東京は3/14、記録的に早かったとか）。地元、芦花公園の名物・高遠小彼岸桜は例年、染井吉野桜よりも早く開花するが、今年は3月はじめがピークで、日中は多くの家族づれが園内でくつろぎ、遊んでいた。

　実は、２月半ばから赤味の花の河津桜が咲き、あっと言う間に濃い紅色の寒緋桜やおかめ桜が続いて現れた。そして最近では、次郎桜(＊１)、大島桜、枝垂れ桜も顔を出し（４月になれば黄緑色のギョイコウ桜や八重桜も加わり）、多様な桜を楽しむことができる。つまり、芦花公園では、染井吉野は主役の座を奪われている感じがする。とは言え、今（3/24)は、粕谷八幡神社と道路沿いには染井吉野の桜並木が満開の花が広がり、周囲を謳歌している。

＊1: 次郎桜は品種名ではなく、明治の文豪・徳富蘆花が学費を支援した苦学生・篠田次郎の名に由来する。きつい労働をしながら大学で学んでいたが、肺炎で急死した事を悼んで植えられた。

　私は、公園と近隣を歩きながら多様な桜をカメラで追っているが、“本来の”日本の桜の風景を見ているのかも知れない、と最近買った本「チェリー・イングラム　日本の桜を救ったイギリス人」を読みながら思った。桜と言えば染井吉野と多くの日本人は思っている現実を客観視させられたからである。改めて説明するまでもなく、染井吉野は、例年は４月はじめから温暖な地方から北海道まで次々と咲き（桜前線）、１週間ほどで花は散る。多くの日本人は、一斉に咲く短い命を存分に愛で、身と心を浮き立たせ、宴の後に命の儚さを共有している。今や日本を代表する桜である。この品種は江戸後期に大島桜と江戸桜の交配によって生まれたクローン（全く等しい遺伝子組成を受け継ぐ生物）で、江戸後期に大島桜と江戸桜の交配によって生まれ、明治以降、全国各地に広がり今に至っている。

　しかし、イングラム(1881-1982)は、日本の自然（野鳥、桜）と日本人のセンスに魅了されながらも、桜の品種が減っていくことを憂い、日本の山桜、里桜をイギリスに移植して育て、交配品種もつくった。その成果を、長期間にわたり次々に咲く100種の桜の庭園に遺している。彼が大事にしたのは一種類ではなく、多様な桜であった。庭園はその証しであった。

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける　No.42

「3月を駆け抜けた花々　Flowers that ran through March」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　4月1日 記述

あっと言う間に３月が過ぎ、起きた時はすでに外は明るく、桜や桃の花が目に入る。日の出がいつの間にか5:30前になっていた（ウソではない）。春、春、春なのだ！もう後ろに戻ることがない。自然界の生き物たちは備わった命を燃やし、自己の存在をアッピールしているようだ。植物たちは次々に花を咲かせ、その様は爆発的という表現がふさわしい。

　そこで、３月に見た花を振り返ってみた（見た花の数の半分にも満たないが）。お馴染みの花が大部分と思うので解説は不要だろう。地面にそっと芽を出し、小さな花を咲かせ既に退場した野草も多い。そんな中で可憐で特に目を引いた花がシデコブシ(花弁数が何と9~25枚 )とキクザキイチゲ(キンポウゲ科)。

　検索中に学んだ知識：  
① ツクシ（土筆）は春先に出る胞子茎の名で、正式名はスギナ（杉菜）。英語名を訳すと「野原の馬の尾」。土の筆と見た日本人との違いがおもしろい。

② ホトケノザ(仏の座)は、別名「三界草」。春の七草の仏の座は別の植物。

③ ハナニラ（花韮）には白、ピンク色もある。英語名は[Spring Star(春の星)。](https://springstar.official.ec/)

④ ドウダンツツジ（灯台躑躅）には別名があり、満点星。連想できますか？

⑤ レンギョウ（連翹)のギョウの意味は「つまだ（爪立)てる）で、花が連なって爪先立ちしている様を表している。

⑥ ハナズオウ(花蘇芳)は、赤色染料・蘇芳(スオウ)の木を用いた蘇芳染めに由来。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 43

「われらバラ科族 スモモもモモも梅も桜も

　　Plum, Peach, Ume & Cherry are one family」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2021年４月12日

　No. 41のサクラ特集アルバムのつづきをつくるために八重桜に注目して来た。これまでは染井吉野桜が日本中の人気を集め、マスコミに取り上げられるのに対して、八重桜は後追いの変種桜のように見て来たことを告白しなければならない。しかし、No.41で紹介したC. イングラムの本によって桜の多様性の価値に気づかされたので、今年は新たな目で桜を追った。すると、関山、白妙のように広く分布している美しい八重桜に出会えた。

黄緑色の桜・ギョイコウ(御衣黄)が交配によってつくられた八重桜であることも知った。

さらに、ボテっと咲く桜のイメージが覆されるユニークな八重桜の存在も知った。

椿やバラと同様、桜も交配種が多く、特異な名が付けられていて検索に苦労した。そんな中、完璧な「サクラ図鑑」に出会った、桜ファンの方は参照されたい。

http://www.hananokai.or.jp/sakura-zukan/yp\_szukan/d/d3000.html

　今回、花桃にも目を向けた。その学名をチェックする中で、桃だけでなく李(スモモ)も梅も、桜と同じファミリー（バラ科）に属することが分かった。そこで、同じアルバムに収めることにした。ここでも多様なかたち、色の美しさに魅せられた。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 44

「われら春の兄弟花：違っていても仲良し

　　Sibling flowers, different but friendly

2021年4月17日

　春の花々が驚くことに例年よりも2,3週間早く、しかも爆発的に咲いている。その中で、兄弟というかペアと言える花に出会える。分類的に科、属が同じで色や形が同じならば兄弟と言えるが、中には異なる科の花がある。そこで今回は、見た目で兄弟と思える花に注目してみた。

　一輪草と二輪草は、葉の形と花の形が異なり、学名の前半が同じことから兄弟と言える。同様に色違いのツツジ、スミレも。ハナミズキは色が違うだけの一卵性姉妹のようだ。ドッグウッドという別名で広くアメリカ人に愛されている。アメリカに桜を贈った返礼として贈られ日本に広がったと言う。

　山吹には桜のように一重と八重がある。山吹に因む古来有名な和歌と逸話をご存知でしょうか。「七重八重花は咲けども 山吹の実の一つだに 無きぞ悲しき」。江戸城を築城した

ことで知られる太田道灌は、鷹狩の最中に雨に遭い、蓑を借りようと粗末な小屋の娘を訪ねたが、黙って山吹の花枝を差し出された。道灌はその真意が分からず怒って立ち去ったが、昔の和歌に真意がある事が分かって無知を恥じ、和歌を学んだ､と言う。では、山吹は本当に実がならないのか？実は、ならないのは八重だけで、一重の山吹は実をつける（黒い実を見たことがある）。  
ここで別の驚き：白山吹は、花や葉が山吹に似ているため命名されているが、実は別属の植物である、と言う。兄弟ではなく、顔と性格がよく似た他人というワケだ。

　タンポポの英語名dandelionは“ライオンの歯”の意味で花の形に由来する。タンポポには、よく見かける外来種と日本固有種が存在する。遺伝形質が全く異なる。見た目の違いは、花の付け根の苞片(ガク)が反り返っているのが外来種で、在来種はガクが上向きに重なっている。なお、在来種は、東北地方南部と四国東部に多く見られる、と言う。

　イカリソウの名が船の碇の形に由来することは、見てすぐ分かるが、その美しさは、白鷺が羽根を広げて大空を舞う姿を思わせる。ピンクの縁取りをもつ鳥はフラミンゴか？

　野草のムラサキケマンと派手なケマンソウが兄弟であると言われて、直ちに納得できるか？実は全く別の花。両方とも花の形がケマン（華鬘＝仏前に飾る花輪類）似ているためだが、異なる花輪に由来する。ケマンソウの名はハート形の花輪に由来し、別名の鯛釣り草はズバリ大漁の鯛を連想させるからだ。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 45

「近隣に咲くレアな（珍しい）花々　Rare flowers in neighborhood」

2021年4月21日

百花繚乱のことばに相応しい４月も半ばを過ぎたが、今年は特に3月の気温が高かったせいか百をはるかに超える花々が咲いている。そこで今回は、４月に見たレアな花を採り上げたい。レアと言っても、馴染みの花もあるかと思うので、クイズ形式にしてみた。

①ニオイローバイ（匂い蝋梅）：１月に咲く薄黄色のロウバイとは色も香りも全く異なる。しかし、赤ワイン色の整った姿の花が目を引く。

②ハンカチノキ：枝にぶら下がった様子が正にハンカチ。触ると柔らかな布のようだ。

③カラタネオガタマ(唐種招霊)： 唐＝中国原産。花はバナナの香りがする。英語名はバナナの木(Banana shrub).

④ハクウンボク(白雲木)：青空に浮かぶ白雲に見立てた名。エゴの木の仲間。

⑤リキュウバイ(利休梅)：清楚な花は茶花としても愛されて来た。千利休の命日に咲くという逸話がある。

⑥アメリカザイフリボク(アメリカ采振木)：6月に赤い実(ジューン ベリー)を付け、アメリカではジャムとして人気。花が采配に似ている。今では近隣でも多く見られる。

⑦オオヤマレンゲ (大山蓮華)：奈良県の大峰山に自生する。ハスの花（蓮華）に似た白い花は一度見ると忘れられない。シーボルトが注目し、欧州に移植した。

⑧フッキソウ(富貴草)：耐寒性・耐暑性を兼ね備え、年中緑の葉を生やし続けるので、富の象徴とされた。花言葉は、良き門出。

⑨オオアマナ(大甘菜)：6弁の白い輪郭が美しく、群生する。別名、ベツレヘムの星。

⑩シラユキゲシ(白雪芥子)：別名、スノー ポピー。か弱に見えるが、暑さ、寒さに強く、繁殖する。

⑪ハッカクレン(八角蓮)：蓮の葉に似た八角形の葉の下に赤褐色の花を咲かせる。漢方で解熱剤として利用される。

⑫キバナカタクリ(黄花片栗)：別名、西洋カタクリ。日本原産のピンク色のカタクリよりも遅れて咲き、葉も花も大柄。形はユリに似ている。

⑬セリバヒエンソウ(芹葉飛燕草) *Delphinium anthriscifolium*: セリのような葉、ツバメが飛び交う姿からついた名。印刷版のアルバム中の名は誤り。お詫びして訂正致します。

⑭ヒトリシズカ(一人静)：ブラシ状の小さな白い花が特徴。かつては吉野静と呼ばれた､と言う。なお、後咲きの二人静は、細いブラシが２本伸びている。

⑮ヒメウツギ(姫卯木)：きれいな白い花を穂のように咲かせ、丈夫で長持ちする。庭木として栽培されて来た。

⑯ジュウニヒトエ(十二単)：花が重なって咲く姿が女官の十二単から付けられた名。しかし、派手さはない。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 46

「豪華な花に出会う：牡丹(ボタン)と石楠花（シャクナゲ）　  
　Encounter brilliant flowers; Peony and Rhododendron」

2021年4月29日

今年も華やかに春を彩る牡丹と石楠花に出会うことができた（昨年は、アルバムNo. 5)で紹介した　 http://sengawacx.com/ ) 。

しかし、今年は、コロナ禍の中でありながら昨年に増して多くの種類の華やかな花に出遭えた。牡丹(ボタン）については、黄色の花が真っ盛りの時に出遭い、興奮しながらシャッターを切った。また、赤紫やまだら色の花をいくつも付けた牡丹を見ることができた。

　一方、石楠花（シャクナゲ）について一番嬉しかった出遭いは、日本産の野生シャクナゲ（白色の白根石楠花か？）の満開の姿を見ることができたことだ。西洋シャクナゲよりも葉が細く厚く、正に野生的だ。しかし、シャクナゲはツツジの仲間で、交配によって多様な花が作られていて、私には西洋と日本種を見分けることができないので、興味のある方は日本石楠花のウエブページをご参照下さい。

http://syakunageyumi.web.fc2.com/gieseichi.htm

近隣の自然の変化に目を向ける No. 47

「われらは兄弟姉妹花　　We are brothers and sisters flowers」

2021年5月7日

　単に色違いの花が多いが、形や香りが異なる花や似て非なる花に出会えると、花の観察の楽しみが倍加する。今回は、そのような花に注目し、植物学に基づく名前（青字）だけでなく、見た時の印象から戯れの名前を付けてみた（黒字）。

# 野生蘭の代表と言えるキンラン、ギンランが隣合わせに咲いている姿をはじめてみた。出会えた嬉しさと親しみから、直ぐに金さん銀さん姉妹を思い浮かべた。道を歩いていると甘い香りを放ち、顔を向けさせる花が３種のジャスミン。それぞれ少し日を置いて咲き、春真っ最中にいる幸せを振り撒いている。

# ヒナゲシは昔から馴染みだが、ナガミヒナゲシは、帰化植物で1961年に世田ヶ谷で初めて確認され、繁殖力が強く、瞬く間に全国に爆発的に拡散した。最近、繁殖力が衰えてきた感じがするが、強靱さには驚かされる。

　白のタツナミソウは北斎の立浪を想わせるが、今年、青色の兄弟花が混在する姿を見た。一方、ニオイバンマツリは白と青の花が一本の木に咲くので双子花と言えよう。

　牡丹の花は終えた今、豪華なシャクヤクの花が咲いている。「立てば芍薬」とは、女性の美しい立ち振る舞いや容姿を形容する言葉だそうだが、私が見た花は白も赤紫花も長い茎がしなり、深くおじぎをしているようだった。その心は？ツンとせず美しさは変わらず、人や環境に柔軟に対応する現代女性の姿を示している？

　シラー（釣り鐘草）は公園で広く見られる可憐な花だが、オオツルボ（大蔓穂）という派手な花塊を上向きに咲く兄弟花がある。私は外国で見たことがあったが、最近は、近隣でもよく見かける。

　カタバミは、復活祭(イースター）の頃、仙川教会の庭にも毎年花を咲かせる強靱な草だ。ハート型の3枚葉は、三位一体（父なる神・神の子キリスト・聖霊）を象徴するデザインとして、また日本では、戦国時代から「根を絶やさぬ強さ」から家紋に使われて来たと言う。

　今年初めて長い糸状のヒゲを垂らしたウラシマソウが芦花公園内に姿を現した。浦島太郎が釣り糸を下ろしている姿から命名されたようだ。兄弟と言えそうな植物が２種あった。ムサシアブミとカラスビシャクで、受け口のような形が共通している。

　この他にも兄弟花が多くあるので、違いに注目して観察してみてはどうでしょうか？

近隣の自然の変化に目を向ける No. 48

「ガクアジサイ（額紫陽花）祭　Forehead hydrangea festival」

2021年5月29日

５月が残り少ないことに気づき、これまで１ヶ月間に撮った多くの花の写真を見直している。遅ればせながらアジサイのアルバムをお届けしたい。しかし、昨年の６月にアジサイ特集をした（次のURL）ので、今回は、ガクアジサイ（額紫陽花）だけを集めた。

「アジサイ(紫陽花)祭り Hydrangea Festival」

　アルバムNo. 13：http://sengawacx.com/LookNatureN013a\_2020.jpg

　解説：http://sengawacx.com/FreeSpaceNature13.pdf

　ガクアジサイは、日本固有種であることを覚えていますか？（No.13の解説参照）。最近その種類が増え、色、形の美しい花を目にすることがある。従来の紫陽花（ホンアジサイ）の園芸種が増えているように、交配によって新種がつくられている事が、この度写真を撮る中で感じた。興味のある方は、次のウエブサイトを開いてみて下さい。

https://www.uekipedia.jp/落葉広葉樹-カ行/ガクアジサイ/

　なお、アジサイに似ている白色の花を付ける野生種ノリウツギ（糊空木）とヤブテマリ（藪手毬）がある。どちらもアジサイ科ではない。

芦花公園には、紫陽花街道と勝手に呼んでいるホンアジサイの並木が造られているので、その一部を紹介します。



近隣の自然の変化に目を向ける No. 49

「薔薇バラの美を対比する：Contrast the beauty of roses」

2021年6月1日

　バラ（薔薇）の愛好家は世界中に大勢いる。交配によって新しい種類（株）をつくり展示することに情熱を向ける人は、バラのプロと言えるが、一般にも豪華な空間をつくり出す美しいバラの花に魅了されたバラファンが多いようだ。実は、私はさほどバラが好きではない。理由は？単純で、素朴な野生の花々に先ず目が向いてしまうからだ。バラの姿の美しさ、気品の高さ、多様な色と花形で公園の真ん中で人を引き寄せる力を認めないわけではないが、個人の嗜好なので仕方ない。そのせいか、バラの名前を調べる意欲が湧いてこない。いや、ハマナス（野ばら）は別だ。

　今回のアルバムの中のバラにはそれぞれ愛好家によって考え抜かれた名が付けられているのだと思う（３万種以上あるという）が、ブランクのままであることをお許し頂きたい。お知りたい方は、花の名アプリやGoogleで調べてみてください。

なお、昨年５月にもバラの花特集アルバムを作成し、解説を付記した。

よろしければ、ダウンドーロして見て下さい。

　http://sengawacx.com/LookNatureN010\_2020.jpg

　http://sengawacx.com/FreeSpaceNature10.pdf

　今回は、２つのバラを対比させ、形や色の違いを見ることにした。近隣で見たバラを並べただけなので少々ムリがあると思いますが、多様（薔薇バラ）な美しさを愛でる視点の一つとしてお楽しみ下さい。下段の３種は対比するバラが（努力不足で）見つかりませんでした。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 50

「５月を彩った花々に感謝：Thanks to seasonal flowers in May」

2021年6月9日

 変化の多い５月があっと言う間に過ぎ、数日後には梅雨を迎える時期となってしまった。自然界は初夏に入り、周囲も春の花から夏の花々に入れ替わりつつある。色彩に溢れた春の花たちを見過ごしたわけではなく、撮影したままでカメラに収まっているのだ。そこで、５月に見た花々を数枚のアルバムに収めることにした。

　先ずはスズラン、ドイツ名の意味は「5月の小さな鈴」。

　第２は、５/23に見たモチ（別名レッドロビン）の真っ赤な木の葉。人々の頭上に降り注いた炎に見えますか？（エル グレコの絵を参照。この日は、ペンテコステ（キリストの復活に出会い、神を信じた人々の上に聖霊が炎のように降臨した）というキリスト教会にとってクリスマス、イースターと並ぶ大切な日であった。

第３は5/14早朝の芦花公園。前夜の雨によって霧が立ちこめていた空間に朝日が射して幻想的であった。 　エル グレコ「聖霊降臨」

　５月は多様な花が次々と咲いて楽しませてくれた。その一部を紹介する。甘い香りのテイカカズラ、白いヒダが美しい更紗ウツギ、かんざしのようなフジの花、枝一杯に密集して咲くエゴノキ（漢字名は野茉莉？！）。実を食べると“えぐい”が語源（成分のサポニンが原因）。

版木として有名なホウノキの純白の花は、神々しい。ヤマボウシには花（ガク？）の形と色の異なる品種があることを初めて知った。４月に咲くハナミズキと同じ属だが、後に赤い実を付けるかどうか異なる。

今年、色とりどりのルピナスが芦花公園の花の丘に植えられ、訪問者を楽しませてくれた。

　公園内では、外来種の花が見られる。オーストラリア原産の真っ赤なブラシの木（カリステモン）。ブラシ部分は柔らかく、コップ洗いはできない。年に２度花を咲かせる点でもユニークな木。

ナツツバキ・別名シャラ（沙羅）、沙羅双樹。仏教の聖樹で、お釈迦様が入滅した場所に生えていたとされる木。

フェイジョアは南米ウルグアイ原産で、銀色のガクに赤い糸状の花が特徴。秋に緑色の実（可食）を付ける。最近、日本でも人気で、各地で見られる。

カタルパ（アメリカキササゲ）は、明治のはじめに新島襄がアメリカから苗木を持ち帰り、徳富蘇峰に株分けし、されに（徳富）芦花公園に贈られた木で、今では10m近くに成長し、たくさんの花を付けている。豆が細長く並ぶ莢(さや)＝ササゲをつける。公園内に、カタルパ保育園がある。

\* 本文のpdf変換ファイルを見るには？（花の名を色分けしています)。

http://sengawacx.com/FreeSpaceNature50.pdf

近隣の自然の変化に目を向ける No. 51

「大輪の花が魅力のつる性植物クレマチスとアマリリス

Amaryllis and climbing plant Clematis with attractive flowers」

　 2021年6月15日

クレマチスとは蔓(つる)性植物の意味で、イギリスではバラ(キング）と並んで人気があり、蔓性植物の女王(クイーン)と呼ばれる。日本では蔓の伸び方から鉄線、6枚や8枚羽根の花弁から風車（かざぐるま）と呼ばれてきた(アルバムの最上段)。

　バラと同様、数多くの園芸種がつくられ、特有の名が付けられている（写真の英語名）。

＊　詳細は「湘南クレマチス園」参照。

　　https://www.s-clematis.jp/mail-order/production-list/list-early/all-colors/shirayukihime.html

　興味深い種をいくつか取り上げると、

・ ‘Doctor Ruppel'は、多くの種類のクレマチスを作ったラッペル博士が、赤紫のストライプが特徴的な傑作種に自身の名をつけられたと思われる。

・ ‘白雪姫’は、純白で上品な美しさが際立っている。

・ ‘Princess Diana’(ダイアナ王女)は、清楚な4枚の花弁がユニークで、クレマチスがバラと同様イギリス人に愛されている事を示している。

・リヨン市を意味する‘Ville de Lyon’は花弁が6枚なので、別種（８枚の‘Red pearl／赤真珠’）かも知れない。

# ・壺形の花が特徴の２種のクレマチス：‘integrifolia’は青い壺形の花で、つるを巻かない点が特徴。一方、赤い壺形の‘texsensis’は蔓性で、名は緋色に由来する。

　アマリリスはギリシャ語で「輝かしい」という意味。花言葉は「誇り」。数100種類の園芸品種が知られているが、今年は３種見た。よくみかける真っ赤な「赤いライオン」、白色の花弁が特徴的な「クリスマスギフト」、赤いストライプのambiance(雰囲気）。どれも花弁がかなり大きく存在感がある。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 52

「おかえり6月の花たち： Welcome back, June flowers」

　 2021年6月26日

　気づいたらすでに6月下旬。関東地方は、梅雨入り(6/14) が過去10年間で最も遅かったそうだが、自然界の花々は例年よりも約２週間、開花が早かった。結果、５月中に咲き終えた花々のアルバム作りを優先することになり、6月の花たちを月末まで待たせてしまった。そこで「お待たせ6月の花たち」とすべきが、ボーとしていて朝ドラの影響を受けたタイトルを付けてしまった。

　今年は梅雨入り前にホタルブクロが咲いた。ゲンジボタルが現れる6月第１週よりも早かった。うれしい事に昨年見られなかった白い蛍袋に出会えた。露草は梅雨の象徴と言えるだろう。よく目にする最上段のムラサキツユクサは西欧由来種、中央がずばりツユクサで、万葉集に詠われている月草(ツキクサ)が改名された。水洗いすると色落ちするので手描き友禅の下絵を描くのにこの花を使って下絵用に使われている日本的な花だ。シロバナツユクサは、別名常盤露草。南米原産で、最近よく見かける。露草の仲間について詳しく知りたい方は以下を参照：https://pino330.com/archives/22008

　クチナシも梅雨時を彩る花だ。白色の甘い香りの花が特徴、特に早朝は一重も八重も美くしさが際立っている。しかし、翌日には茶色の斑点が現れ、残念は容姿になるのは哀れ。花の世界にも美人薄命の諺があるのか。

　３種のキョウチクトウ(夾竹桃)に出会った。原爆投下後の広島で最初に花を咲かせた植物が夾竹桃であった事が有名。排気ガスなど公害にも強く、高速道路沿いに植えられ長期間花を咲かせる。その強靱さから復興のシンボルとされているという。

　色違いの清楚なハマユウ（浜木綿）にも出会えた。

　３種のユニークな木の花（菩提樹、泰山木、合歓）を6月の芦花公園で見ることができて感激。菩提樹は蘆花の旧宅の入口に立つ大木だ。開花した姿をここ数年見過ごしていたが、今年はやっと見ることができた。泰山木は大木で、大部分の花は上向きで豪華な花の姿を写真に収めるのが難しい。ところが今年は、低い位置で花を斜め下に向けて咲いてくれた。ネム(合歓)の木も背丈が高く、赤い糸状の花をクリアに撮るのに苦労させられる。しかし今年は、程よい高さに花が寄せ集まって咲いてくれた。しかも青空を背景となり、一段とその美しさを増していた。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 53

「スカシユリ（透かし百合）祭： Asiatic Hybrid Lilly festival」

　 2021年6月30日

　今年は、例年以上に多様で豊かなスカシユリを見ることができた。「透かし百合」の意味をネットで調べると、“付け根部分がやや細く、隙間が見える”ことから名付けられたと言う。**英名は**Asiatic Hybrid（アジア原種を元に交配された園芸品種）、**学名は、***Lilium × elegans*。ユリの中で一番丈夫で作りやすく、日当たりと風通しのよい場所に植えておくと何年間も咲き続けるので、日本では江戸時代初期から交配が行われ、たくさんの品種が作られている、と記されていた。

　百合は、姿、形が優雅で見栄えが良いので人気があり、百合だけの植物園が各地にある。近隣の祖師谷公園近くの花壇にも何種類もの百合の花が咲きそろい、けっこう長い間楽しませてくれた。その大部分がスカシユリで、テッポウユリも数本咲いていた。

　そこで、今回はスカシユリ特集とし、近隣で見かけたヤマユリ、オニユリを下段に載せた。

　なお、ネット情報によると、百合は、花の形態により4亜属に分類される: スカシユリ亜属(上向きで杯状), テッポウユリ亜属 (横向きで筒状)，ヤマユリ亜属(横向きでロウト状)，カノコユリ亜属(下向きで鐘状)。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 54

「愛するアイリス祭： Lovely Iris Festival」

　 2021年7月12日

今年の春も美しい種々のアイリス（菖蒲）が目を楽しませてくれた。遅ればせながらアイリス(Iris)のアルバムを作成した。但し、昨年No.16で花菖蒲を紹介したので、今号では主にアイリス一般を紹介する。和名では、アヤメ（菖蒲）・カキツバタ（燕子花

／杜若）・イチハツ（一初）・アイリスと区別されているが、どれもアヤメ科(Iridaceae‎)アヤメ属(Iris)である。Irisはギリシャ語で虹を意味し、花言葉は希望。人々に愛されるワケだ。

　一つ注意：端午の節句に芳香を発する葉をショウブ湯としてお風呂に入れる薬草は、サトイモ科の葉菖蒲で、アヤメとはまったく別の植物である。

　尾形光琳作の「燕子花（カキツバタ）図屏風」は国宝として有名だが、燕子花は古典園芸植物として平安時代から知られている。一初（イチハツ）も室町時代から知られているアヤメの一種で、種の中で一番先に咲くので名付けられた、という。

　一方、アイリスは西洋アイリスの典型で、青、紫、白の独特の形の花が近隣の公園、庭先で見られる。また、ドイツアヤメも同様で、決してスマートな形とは言えないが、様々な形、色の花が逞しく咲き誇っている。

　アヤメ（Iris）は。古今の時代、東西の国々を超えて人々に愛されている植物と言えそうだ。

＊先号No53の博多百合は、実はテッポウリュ百合の別名でありました。訂正させて頂きます。

近隣の自然の変化に目を向ける 番外編

「大賀ハスとサギ草： Ohga Ancient Lotus & White Egret Flower」

　 2021年7月18日

　梅雨明けの朝、大賀・古代ハスと２年ぶりに再会した。しかも、４輪が咲いたばかりで初々しく、その背後に咲き終えて実の頭が立っていて、ベストチャンスに恵まれた、と感激！昨年はチャンスを逃していたので、今年こそと念じながら近くの東覚院の境内を訪れたのだ。その５日前に下見をした時には、一輪の花が全開前で、桃太郎が産まれて出て来そうな姿であった。

　この蓮は、有名な大賀ハスで、すぐ脇に立っていた看板に記されている通り、絶滅したと思われた蓮の実が1951年に３粒見つかり、その中の１粒を大賀博士が開花に成功、全国に株分けされたものの一つである。私は、2014年にミャンマーはヤンゴンの日本人墓地で大賀ハスを見て感動したことを思いだした。

　　サギ草（鷺草）は、七夕の日、世田ヶ谷の粕谷区民センターに区民が育て展示されていたもの。区の花として知られており、育て方の講習会が開かれている。正に鷺が青空を羽根を広げ、群れをなして飛んでいるかのような花で、一度見たら忘れられない。実は、野生蘭の一種。

（この日は、２度目のワクチン接種で区民センターに行った時で、出遭えた感激で接種の副作用の心配は、空の上に飛び去っていた。）

近隣の自然の変化に目を向ける 番外編

「五輪の夏の花が全アスリートにエール！：

Five summer flowers yell for all athletes 」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2021年7月24日

　自然界の植物の成長、開花、果実、落葉の過程を見ていると、置かれた環境の中で成長に必要な水、太陽光・熱エネルギー、空気、土中の栄養素を取り入れて茎を伸ばし、葉を付け、最良の季節を選んで己の命を最高に表現しているように見える。

　７月、夏の花が強い太陽光と熱を受け、次々と美しい個性的な姿が現れる。中でも典型的な５種の夏の花が、世界中から五輪に参加しているアスリートたちに共感しエール（応援）を投げかけているように見えた。

ヒマワリ(向日葵) *Sun flower*

ハス(蓮) *Lotus*

キキョウ(桔梗) *Platycodon grandiflorus*

アサガオ(朝顔) *Morning glory*

モミジアオイ(もみじ葵) *Scarlet rose mallow*

■「コロナの渦に翻弄(ほんろう)されたオリンピック」に思う

http://sengawacx.com/RhapsodyOlympic2021.pdfmachdty:Users:yoshinoteruo:Desktop:五輪狂想曲TY.pdf

近隣の自然の変化に目を向ける No. 55

「五輪の多様性を支持するかのように咲く夏の花たち

　A variety of summer flowers so like supporting the diversity in Olympic」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2021年7月29日

オリンピック憲章を読んだことがありますか？  
https://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2019.pdf

初めて見て、長いのに驚かされた。その中の**「オリンピズムの根本原則」**の一部 を引用すると、

「スポーツをすることは人権の１つである。すべての個人はいかなる種類の差別も受けることなく、オリンピック精神に基づき、スポーツをする機会を与えられなければならない。オリンピック精神においては友情、連帯、フェアプレーの精神とともに相互理解が求められる。 人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、 政治的またはその他の意見、国あるいは社会的な出身、財産、出自やその他の身分などの理由による、いかなる種類の差別も受けることなく、確実に享受されなければならない。」  
　つまり、参加する人は人間として差別されることはない、という立場の宣言である。言い換えると、多様な人間がかけがえのない人権をもつ個人として参加でき、スポーツを楽しみ、自由に交流する場がオリンピックである。五輪マークはその象徴である。

　自然界には多種多様な動植物が存在し、互いに影響を与え、受ける関係を持ちながら地球という環境の中でそれぞれ固有の命を営んでいる。植物は、気温、太陽照射、陸海水大気など存在条件の異なる環境の中で、様々な形体（木草サボテンなど）、大きさに成長し、季節の変化の中で多種多様な花（形、色、臭いなど）を咲かせ、果実を結び、一時枯れてはまた新芽を出して生き続けている。

　形と色の異なる花々は、昆虫を引き寄せて花粉を運ばせ種を増やすためのようだが、人間の目に映ると美意識を高め、安らぎを与えてくれる。人間はさらに、花を贈り、飾ることによって感謝、お祝い、喜び、追悼などの気持ちを表現するために使う。  
　***VIVA NATURE,*** enjoy the richness, the diversity and change!

　夏の季節に咲く花の数は多く、一種類の花でも多様な色、形の花を見ることができる。その違いに気づかされると自然環境の豊かさを実感でき、幸いな気持ちになるのではないか？  
　今号は、代表的な夏の花を5種紹介する。形、色の違いを楽しんで頂きたい。  
ヒマワリ（向日葵）、キキョウ（桔梗）、キスゲ（黄菅）の仲間（キスゲ、カンゾウ）、フヨウ（芙蓉）（３色のアメリカフヨウ）とムクゲ（木槿）（一重と八重）。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 56

「夏本番: 夏の虫たち、果実： Hot summer: summer insects ＆ berries」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2021年8月5日

　関東地方の今年の梅雨明けは7/16であった。それまでの日々、梅雨前線が線状降水帯として次々に日本列島を通過、停滞し、各地に記録的な豪雨をもたらした。梅雨明け前日に雷が鳴り、翌朝真っ青な空の陽の下、カーと暑い夏がやって来た。このような劇的変化は、子どもの頃の梅雨明け／夏休みの始まりを思い出させる。里山にはニイニイゼミから始まってアブラゼミ、ミンミンゼミが鳴き出し、ツクツクホーシが鳴けば夏休みは半ば。やがて、ヒグラシの声が夕方聞こえて来ると、真夏の池の水辺を飛び交っていたトンボも見かけなくなり、もう夏休みはおしまい……であった。

　話は今の芦花公園：毎朝、数10匹ものアブラゼミが賑やかに鳴き、あちこちの枝木に羽化した後の抜け殻が見つかる。ラジオ体操の後、樹木を廻ながらセミ殻を熱心に集めている人たちがいる（実は体操の仲間）。何のため？漢方薬の材料とする夫人のために仲間が遊びがてら協力しているのだ。途中、羽化したばかりのセミを見かけることがあり、新たな命の神秘を感じている。

　今回の特集は、木の実と食べられる実（ベリー）。

　木の実さがしをしていたところ、芦花公園内にエノキ（榎）の大木がある事が分かり、感激。名の由来は夏を象徴する木かと思いきや、夏に日陰を作る樹を意味し、和製漢字であると言う。各地の神社に御神木として植えられている。果実は食べられ、味は甘い。すぐ近くに榎という地点（バス停）があるので、親しみが湧いた。

ホウノキ（朴の木）の白い肉厚の花は泰山木に似て優雅だが、実は食べられない。

ボケ（木瓜）の実は固く、野の獣も鳥も食べないようだが、実は梅酒と同じ味の果樹酒となる（体験済み）。  
　モミジバ フウ(紅葉葉 楓)は、トゲトゲの栗に見えるが、秋には赤褐色の実として地に落ちる。アクセサリーの材料としても使える。サンゴジュ（珊瑚樹）はその名の通り、赤い実がサンゴのように海中の岩のまわりに漂っているようだ。ムクロジ（無患子、soapberry）は秋になるとアメ色の実となり、皮は高貴な人だけが使える石けん代わりに、また黒い堅い種は羽子板の羽根の玉として使われていた。

　食べられる実が春半ばから夏にかけ、自然界にも栽培種としても多く見ることができる。

野いちご（野苺）には、うす甘酸っぱい木の実と、別名ヘビイチゴという草の実がある。どちらも可食だが、ヘビイチゴは名の故に摘んで食べる人が少ないようだ。木イチゴは果物店にも並ぶ実で、改良種が多く作られジャムやケーキ用に用いられている。グミ（茱）は俵グミと呼ばれ、昔から庭先に植えられていた。独特の渋みが今も忘れられない。桑の実も自然の恵みで、子どもの頃、口の中を真っ赤にして食べた。摘んでいる間は食べ放題のブルーベリー畑近くにあり、毎年楽しみにしている。5ｃｍ程の実がなるザクロの濃い橙色の花に目が引き寄せられた。

　近所の農園で買ったビワの実が水水しく美味しかった。イヌビワはビワとは違い、イチジクに近い味がする。ジャムにすると朝食が豊かな気分になる。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 57

「われら真夏の花ここにあり(その１と２):   
　We are flowers in hot summer Part 1 & 2」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2021年8月17日

梅雨明けと共にやって来た猛暑とコロナ・デルタ変異株による感染の増加によって生活感覚が狂わせられてしまったのではないか？その中で始まったオリンピックは、日本人アスリートが大活躍で予想をはるかに超えるメダルラッシュに、暑さもコロナの不安も忘れてTVによる観戦に目も耳も釘付けとなった（少なくとも私は）。そんな日常感覚を失った２週間が過ぎ、気づいてみればコロナ感染者が（東京では5000人超の）うなぎ上りとなっていた。オリンピック開催中は３つの台風が本州直撃することなかったのに、閉幕後は梅雨に逆戻りしたかのように前線が日本列島上に停滞し、記録的な豪雨が各地を次々に襲い甚大な被害をもたらしている。天地も私どもの生活も大揺れ状態だが、その中でも自分なりの羅針盤をもって進んでいるか？進めると言えるか？一人の（地球）市民として、一市民として考えさせられている。大それた事（問）ではなく、自然の変化を見ながら考えたのだ。

### 天地が激動しても自然界の草木は季節の変化に応じて成長し、自分なりの花を咲かせている（今年は例年よりも約２週間、開花が早いようだが）。そこで、今号は今年の夏に生命を輝かせている近隣の花たちを紹介する。

### アサガオの花の色と柔らかな花弁は、暑い夏にも涼気を感じさせてくれる不思議な魅力がある。日本には朝顔祭があり、家々で鉢植えの朝顔を育てている理由が分かる。芦花公園には園の職員のおかげでウバユリが群生しているが、今年の開花は早くかった。

### オオトリトマは南アフリカ原産のユニークな花で、新体操のこん棒を想わせる。

### リュウゼツランはメキシコの熱帯域に自生する植物で、茎からテキーラ酒が造られ、葉の繊維から織物が作られる。

　タチアオイの学名althoeaはギリシア語の治療を意味し、古くから薬草としても使われ

て来た。花の色は赤、ピンク、白、紫、黄色など多彩で、炎天下次々と新しい花を咲かせ、2ヵ月近く咲き続ける。

昼咲月見草は、初夏から長期間咲き続ける丈夫な花で、アスファルトの道端でもよく見かける。小待宵草は、待宵草（月見草）よりも背丈が低く、小さく可憐な花を咲かせる。

ノーゼンカツラは、明るいオレンジ色のいくつもの花が滝のよう連なって咲くので、遠くからでも目を引く。ハナビシソウは、黄色やオレンジ色の花が地面を覆うように咲き揃い、存在感のある丈夫な花だ。  
昼顔は日本原産の花で、朝顔に似ている小型の花が昼間も咲き続けることが名前の由来。  
白粉花（オシロイバナ）には白だけでなく赤、黄、まだら色などの花がある。江戸時代には種の中の白い粉が化粧用に使われていた。

最近よく見かける可憐なゼフィランサスはタマスダレの仲間で、ヒガンバナ科に属する。  
ナツズイセンは淡いピンク色の美しい花で、秋に咲く紅色のヒガンバナと同じ科。葉が水仙に似ている。

チコリはヨーロッパではよく食卓に出る野菜。花は薄紫色の細い花弁が放射状に並び円形の花となっている。

青い矢車草が一般的だが、八重の濃い紫色や白色の花が栽培されている。

オリランソウ（花魁草）の名は、華やかな花の姿から付けられたと思ったら、花の香りが花魁の白い粉の香りに似ているかららしい。

フウチョウソウ(風蝶草）は蝶が舞う姿にも似た美しい花だ。

黄色の夏の花2種：キクイモ(モドキ)とオオハンゴウソウ。印象は、どちらもなぜか実直。

ギボウシには多くの種類がある。これは最も典型的な種。なお、**擬宝珠と**は橋や寺院の階段、欄干の柱の上に設けられているネギ坊主の形をした飾りのこと。

サボテンの花の際だった美しさと鮮明な色にはいつも目を見張らされる。乾燥地でも鮮やかに咲く姿は何を意味するのか？

近隣の自然の変化に目を向ける 番外編(Z4)

「決してさぼってないサボテンたち

　Cactuses: not lazy but miraculous plants」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2021年9月6日

サボテンは木か草か？（生物学的に問う：草木か木本か？）。実は、決めかねている（不明確な）植物で、多肉植物と呼ばれている。サボテンの語源は？樹液がシャボン（石鹸）として使われていた事からシャボテンとなった。カクタスcuctusはギリシャ語で棘だらけの植物を意味する。中国名は仙人掌。2000種以上存在し、独特な形態、棘のある体から目を惹く原色の美しい花が乾燥した荒地に凛と咲く特異な生態などに魅せられたサボテンマニアが世界中にいる、と言うWikiの記述に素直に納得できる。日本では、愛知県春日井市が「サボテンのまち」として最大産地で、地元大学で研究、企業と連携して町おこしをしている。コロナ禍でサボテンを家で育てる人が急増しているという巷のウワサは、ホームセンターの園芸コーナーを見ると本当だと思える。

　今回のアルバムに紹介するサボテンは、過去数年間に芦花公園はじめ各地で撮影し、わが家で育てたことのある花（月下美人）である。

#### 上段の３種はクジャクサボテンの仲間で、その優美な姿に誰もが目を見張らされるだろう。

芦花公園内で見たクジャク（孔雀）サボテンは、数日間散歩する人々を楽しませてくれた。

月下美人は、その名の通り夕刻から咲き始め、夜半に全開する。その過程を写真に収めている間、甘く香りに部屋が包まれた。驚いたのは、開きつつある花の中に指を入れると温かかった事で、開花するためのエネルギーが伝わって来た。実際には、夜間に虫を呼び寄せ、花粉を運ばせる植物なりの知恵かと思う。朝には花はグッタリ萎えた姿に変わるが、それを冷蔵庫に保存し、薄い酢を加えて食べると、粘りのある花弁が美味しい。優雅な月下の夜を堪能できる（Queen of the Nightをぜひ体験してみて下さい）。

花盛丸もわが家で育てたサボテン。均整のとれた美しい花が２輪、３輪と咲く。和名は今回知ったが、下段の花にもそれぞれ凝った和名（旺盛丸、花盛竜、栄冠玉）が付けられている。サボテンマニアの心意気が伝わって来るようだ。

　なお、錦晃星と黒法師は、花ではなく肉厚の葉の広がり方が独特の魅力を有する多肉植物だ。この種のサボテンに熱中しているマニアがいる事を今回新たに知った。

　サボテンには他の草木類の花とはまた違った魅力があるようだが、熱帯果実のドラゴンフルーツは食用として有名(マレーシアの子どもの家で食した事を思い出す）。  
　わが家のベランダで元気に育っているアロエについて一筆：さすがサボテン、数年間水上げを忘れていても（雨水で）枯れることがなかった。株分け後、毎朝水をあげているので生き生きとどんどん増えている（お分けします！）。葉は、軽い火傷や擦り傷などの炎症を沈静させ、回復を早める効果、さらには解毒作用、二日酔いに効果もあるとされている。見るだけで満足だがいつか世話になるかも。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 58

「秋の到来を感じさせる花々:   
　Flowers you may feel the arrival of autumn」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2021年9月16日

9月も半ばとなり秋の気配が確実に深まりつつある。皆さんは秋の到来を何によって感じていますか？近隣の植物に感じた日本の秋を４枚の花の写真でお示します。

　先ず、秋の草木を意味する漢字の萩。芦花公園内には萩のアーチがあり、秋が深まると満開の萩のトンネルができる。園内を歩いていた時、突然甘く上品な香りに包まれた。脇に目を向けると満開のオレンジ色の金木犀の花が一斉に「今、秋の真ん中にいるのよ！」と伝えてくれた。  
名にし負う秋明菊は秋の到来を実感させてくれる花だ。日本原産であるのがうれしい。

ナデシコ（撫子）は秋の七草の一つ。今年の9月から .WEリーグが開幕したが、なでしこジャパン（女子サッカー日本代表チームの愛称）として世界で活躍してほしい。

　百日草は、百日紅（さるすべり）と同様、その名の通り初夏から咲き始め、100日過ぎた秋に入ってもしっかり咲き続けるお馴染みの花だ。子ども頃、庭に毎年咲くのを見ていたので希少性が感じられず、注目すことがなかった。ところが芦花公園の体操仲間の一人が百日草ファンであることを知り、意識して見始めた。すると、放射状に広がった花で、形に乱れがなく、長持ちするので庭を明るくしてくれる素敵な花である事が分かった。目からウロコが落ちる体験であった。平凡な娘（Mediocre girl)と思っていたのが器量良しで働き者の娘に見えて来た。

　松葉牡丹も春から夏を越して咲き続け、どこにでも見られる花だ。最近はポーチュラカという名で売られており、庭先や道路沿いに植えられている。昔ながらの花だが、多種多様な色や形の栽培種があり、愛らしく丈夫なので広く愛されている。

　下段の４つの花は、典型的な秋の花。６方向に真っ白な刃形の花を付けたタマスダレ（玉簾）。集合して咲くのですぐに目に付く。名の由来：白い小さな花を「玉」、細長い葉の集まりを「簾」に例えている。花言葉「純白な愛」はぴったりだ。

　オミナエシ（女郎花）は秋の七草の一つ。名の由来：近縁種オトコエシ（男郎花）に対して、女性らしい印象を与えるオミナエシ（女郎花）という説。

　マツリカ（茉莉花）は、今年初めて見た花。検索して名が分かり驚いた。何と、ジャスミンの中国名。ジャスミン茶は緑茶かウーロン茶の茶葉に茉莉花を混合したものである。

# ボタンクサギ（牡丹臭木）は、花は牡丹のように美しいが、枝葉に独特の匂いがあるため、残念な名前になった。実際の姿は、写真のように美しいのでカシミア・ブーケという別名とも呼ばれている。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 59

「中秋の花々: Mid-autumn flowers」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2021年9月29日

中秋とは？ 大陰(旧)暦では7月〜9月を秋としていたので、真ん中の8/15を中秋と呼んでいた。昔の日本では、その夜の満月を「十五夜・中秋の月」として愛で、団子を供え、和歌を詠んで祝っていた。旧暦は月の満ち欠けの1周期(29.5日）を１ヶ月としていたが、太陽暦に従っている今とは必然的に暦（月日の表示）が変わり、旧暦の8/15は9月の半ばから下旬になり、満月の日も毎年変わることになった。今年の中秋は8年ぶりに満月となり、9/21の夜半に真南の空に満月が見えた！地上ではススキが穂を付け、槇の木は実を団子の形に変えて迎えているようであった。

＊おさらい：太陽暦：地球が太陽の周りを回る(公転）周期（１年365日）を基準にした暦、

　　　　　 (大)陰暦：月が地球の周りを回る(公転）周期(1月29.5日）を基準にした暦。

　秋分の日を迎えると、暑かった夏からやっと涼しい秋となり、身体も心も落ち着く日々になってほしい、と誰もが期待する。しかし今年(9/23)は、30℃を超える夏日であった。それでも朝夕の気温はやや低く、秋の花々が目立つようになっていた。その代表が彼岸花である。ところが今年の彼岸花は、9/23には大部分が満開時を過ぎ、萎れ始めていた。

日頃から花の開花に関心を向けている人は気づいていると思うが、今年はどの花も2、3週間開花が早い（先号紹介したキンモクセイの花が香りを放つのは例年10月に入ってからだ）。

　芦花公園のコスモスは例年通り花の数が増えつつあるが、黄花コスモスだけは9月の初めからあちこちで咲き誇っていた（珍しい光景だ）。

　３段目の写真は西洋由来の花々。最近一般家庭の庭によく植えられている。その中でも＊＊マツリ（＊＊茉莉）と言う名の花によく出遭う。例えば、今号のルリ茉莉、ハリ茉莉、先号の茉莉花＝ジャスミンなので、どれも芳香な花なのかも知れない（未調査）。

　４段目は、公園内に今咲いている花々。マグノリア ジニーはモクレンの仲間だが、秋に咲くとは驚きだ。ヤブランは丈夫で長い間咲き続ける秋の花だ。ジンジャ（ハナシャクシャ、花縮砂）は花びらが心地良い芳香を放つユニークな花だ。ショウガ科の植物だが、食用の生姜（ginger）の花ではない。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 60　　(訂正版）

「狂い咲き？気候変動に従っているだけ？

Off-season flowering or just following climate change？」　2021年10月6日

 今年は花の咲く時期が2週間位早い、また、狂い咲きの花によく出遭うのが気になっていた。何が原因なのだろう？気候異変が影響しているのだろうか？と思ったりしていた昨日(10/5)、「地球温暖化の原因と予測について1960年代からの研究をされてきた真鍋淑郎博士はじめ３人の地球物理学者がノーベル物理学賞の受賞者に選ばれた、という嬉しいニュースを聞いた。開花時期への影響を考えるグッドタイミング？と思い、受賞理由ついて調べてみた。

　産業革命以前と比較して大気中のCO2濃度が、石炭・石油の燃焼により２倍になると「温室効果」により気温が2.36℃上昇するという真鍋氏の数値予測(1967)が世界中で注目され、温暖化対策が始まった。例えば、IPCC(国連気候変動・政府間パネル,1988)が結成され、京都議定書(CO2排出基準を提案. 1997), パリ協定(気温上昇を2℃以内に抑えることを決議, 2015）と国際的な対策が進められている。具体的行動としては、SDGs（持続可能な開発目標）のNo.13 で、各国（政府、企業、組織、個人）が連携して達成すべき目標／課題とされている。

　植物の成長と開花を決定する要素は？温度だけでなく、栄養、給水H2O、光の強度、酸素O2とCO2、植物ホルモンなどが考えられ、単純ではない。開花時期は、気温変化、日照時間の変化の影響を受けるが、アルバム最上段は、本来は春に開花するのに秋にも咲いている例だ。

　いわゆる“狂い咲き”の原因として、植物生理学者は、成長に伴う植物ホルモンの供給が高い気温などのストレスがあると早く花を咲かせて、種子を作ろうとすることにある、と言う。（<https://jspp.org/hiroba/q_and_a/detail.html?id=1104>）。また、秋に桜が咲く原因として、アメリカシロヒトリによる食害（夏に葉を食い尽し、葉中の植物ホルモンが失われるため）が報告されている。（下段の十月桜は、大島桜と小彼岸桜の交配によって造られた桜で、２度咲きの遺伝子を持っている）。

　中段の朝顔の開花は、異常ではない。日本では、朝顔市が7月に開かれるので夏の花と思われているが、実は10月半ばまで花を見ることができる。特に、西洋朝顔は秋が開花期である。今年は、銀杏（イチョウ）の実が9月中に落果、例年よりも半月早い（大型台風にもよるが、早過ぎると感じた）。なお、銀杏の拾い集め方のヒント：ゴム手袋を使用（かぶれ／アレルギーを引き起こすイチオールに触れないため）、ビニール袋に集める（処理する時に水と重曹を加え、外から揉んで実を皮から剥がす）、重曹を加えると、臭い成分を中和し無臭にする）　　　<http://sengawacx.com/TreatGinko.jpg>

　下段は、どれも２度咲きの花：オーストラリア原種のブラシ、9月半ばに早咲きした

金・銀木犀(モクセイ)が半月後に再び咲き、周囲に甘く、爽やかな香りを放っている。

近隣の自然の変化に目を向ける   No. 61　　  
「豊かに実っている秋の実は、何のために実を結んでいるのだろうか？What is the reason for the abundant autumn fruits to bear fruit?」　    
 2021年10月19日

　春に花を咲かせた木が、秋になって実を結ぶ、この自然の営みを実感する季節となった。

白い甘い香りの花をつけていた柑橘類が9月半ばの今、次々に青い実を付けている。農家の庭に実った青ミカンをいただいて口に入れた ー酸っぱくほっぺが歪むー と予想したが、何と甘かった（黄色に色づいたミカンのような甘さではなく薄味であったが）。

古くからの地元の大農家（本橋さん）の庭には、スダチ、ユズ、レモンなどの柑橘類が青い（正確には緑色の）実をつけていた。また、近隣の庭先には、昨年に続いてブンタン（ザボン）の実がいくつもなっていた。

　今年は柿の当たり年のようで、朝のラジオ体操でお世話になっている芦花公園近くのTさんの庭に次郎柿が重なるように実をつけていた。毎年、木に登って取って戴いていたが、今年はTさんが脳梗塞で倒れ入院していたため、木になったままだった。ところがある朝、大部分取り去られていてビックリ、残念！　一方、渋柿には鳥も近づかず、たわわになっている。タダで戴いたので皮をむき、干し柿にした。甘柿よりも甘くなるか？（イエス！）。では、強烈な渋さの豆柿ではどうか？皮を剥いたら大豆サイズになる、やはり鑑賞用か？

　秋らしい赤い実が目に付いた：ハナミズキとヤマボウシの花は似ているが、全く違う植物。実の形だけでなく毒の有無でも正反対。ヤマボウシの実は薄甘味だが可食でジャムになる。乾燥させて食すると整腸効果があるという。ハナミズキの実は有毒なので要注意。   
 サンショウ（山椒）は、緑色の実を乾燥させ粉末にすると香辛料となる事は知られているが、秋に鮮やかな赤色の実になる事を初めて知った。赤山椒、花椒 （ホアジョウ）とも呼ばれ、知る人ぞ知るらしい。  
 モッコク（木斛）は江戸時代から庭木の王として重視されて来た木だが、赤く熟した実が食べられるとは知らなかった。野鳥がつつきに来ることが可食の証拠。10月半ばの今、熟した実が裂け赤色の種子が見える。

　味覚の秋を飾る食用の実を３種：ムベ（郁子）は、アケビ（木通）と同じアケビ科の植物だが、ややサイズが小さく、アケビと違って熟しても裂けない。キウイフルーツはすでに定番の果物となっているが、中国原産種をニュージーランドが品種改良に成功し、アメリカ経由で日本に入り､今では三鷹産が有名になっている。世田ヶ谷の農家でも広く栽培されている。  
　クリ（栗）についての説明は不要だろう。今年は豊作だったようで、近隣の畑でもイガグリ（毬栗）が枝に重なり裂けていた。  
  エノキ（榎）の大木が芦花公園にある事を今年知り（No. 56参照）、榎の小さな実が可食であるという情報に興味をもち、秋に熟するのを楽しみに待っていた。濃紫色になった小さな実を口に入れたところ、黒砂糖のような甘みが感じられ、感激。そこで友人に勧めたが、遠慮された。現実は、実を味わうことで現実となるのに…

近隣の自然の変化に目を向ける   No. 62　　  
 晩秋に向かう草木の葉・実・花の姿  
 The appearance of plants heading for late autumn  
 2021年11月19日

　秋も深まり11 月下旬近くになった。日の出が6:20, 日の入りが16:30 と日照時間が短くなった。芦花公園で毎朝行っている体操が始まる6:15 頃、東の空が赤く染まり、朝の光が木々の間を通って長い帯のように地面を照らし、そこに背の高い人の姿が映る。

１ヶ月後には冬至を迎え、暗い中で体操を始めることになる。しかし、毎年、皆勤の仲間と励まし合って続けて来たので、今年も自然の変化を楽しみながらガンバリたい。

紅葉・黄葉：現時点の公園内は、欅やプラタナスの葉が黄色に染まりつつあるが、紅葉

はこれからだ。ちょっと不可解なのは、都内の別の場所の銀杏は樹木全体が黄色に染まっ

ているのに、公園内の銀杏はまだ緑のままだ。実をたくさん稔らせたためか？黄色の絨毯

の上を歩ける時を楽しみにして待つことにしよう。

秋の実：今年も公園内でサネカズカラの実をたくさん見ることができた。緑色の小粒の

実が１ヶ月かけて赤い房状に変わる。自然のかんざしを想わせ、俳句や絵手紙を趣味とさ

れる人の素材となっている。トゲトゲボールのようなカンレンボクの実も園内を散歩する

人たちの目を引いている。アクセサリーの材料に使えそうだ。ムラサキシキブは美しい秋

の実として知られているのが（コムラサキとも言う）。紫式部との関連は？と思い調べる

と、元々の名ムラサキシキミが改名されたとあったｓ。

典型的な秋の花を３種：ケイトウには赤がふさわしいのはやはり鶏頭を想わせるからだ

ろう。他にも赤い葉のケイトウがよく知られている。秋の字から成る萩には、赤紫色と白

色がある。9 月の十五夜近くに咲く赤紫のハギが、11 半ばに２度咲きした。気候異変か？

下段の４つの花を開花時期に注目してみたい：優美さをたたえているネリネ・ポデニー

の別名がダイヤモンドリリー。ヒガンバナ科の植物で、開花は晩秋から12 月。

ツワブキは今が咲き時とばかり各所でみかけるが、皇帝ダリアも同じで、例年は12 月に

入ってからが最盛期。早咲きと言える。しかし、寒さが増しつつある晩秋に色、形の見事

な花が開花するとは、何と豊かな季節かと思う。一方、シャリンバイ（車輪梅）は本来は

４月以降に咲く花なので、“狂い咲き”と言える。上から見ると、中央の梅と似た花から８

枚の葉が車輪軸のように伸びている形が美しい。

近隣の自然の変化に目を向ける   No. 63　　  
 11月の花：キク（菊）とサザンカ（山茶花）   
 **Flowers in November: *Chrysanthemum* and *Camellia sasanqua***  
 2021年11月30日

今年はほとんどの花が例年よりも約２週間早く咲いているが、菊とサザンカ（山茶花）は11月中に次々と咲いていたので、違和感はなかった。11月の花の代表と言えそうだ。

　先ず菊：自転車で行き来していると公園や垣根沿いに様々な菊の花が目に入る。個々の名前は知らず、特に興味がなかったが、ネットで調べるときちんと分類されていた。そこで最も色・形が近い花の名称を検索しアルバムに記したが、確信のないものもあるので間違っていましたらお知らせ願いたい。なお毎年、文化の日(11/3)になると近隣のコミュニティーセンターで菊展が開催されるが、今年はコロナ禍のせいか小規模で、大菊が５鉢とスプレーマムが数鉢展示されていただけであった。

　サザンカ(*Camellia sasanqua*)の中で最も多く見られるのが薄赤色の花だろう。この花はカンツバキ(寒椿)とも呼ばれる。12月から３月頃まで多種多様な花を咲かせる椿(*Camellia japonica*)とはCameriaの仲間だが、別種に分類されている。どちらも日本原産。江戸末期にシーボルトが苗木をヨーロッパに持ち帰り、オランダはじめ各国に広め、人々に愛された（アジサイと並んでサザンカの美しい絵が、日本植物誌(“Flora Japonica”)に載っている。）

　芦花公園では、一重の花が10月下旬に咲き、その後様々なサザンカが近隣にも咲き出している。

　なお、本シリーズNo.39で「サザンカと椿」を特集、区別の仕方などを解説したのでご参考ください。

http://sengawacx.com/LookNatureNo39P1\_2021.jpg  
http://sengawacx.com/FreeSpaceNature39.pdf

番外編：近隣の自然の変化に目を向け、  “ Merry Christmas！”  
                                            　　　　　　　　　　　   2021年12月

目下、アドベント第３週目、次の日曜日は、第４週・クリスマス礼拝です。

近隣の自然は、まさに紅葉・黄葉の真っ最中。木々は、多様な赤・黄色の葉、枯葉が入り混じり地面は色々な形と色の落葉が重なり、大きく広がった絨毯のようです。黄金色の銀杏の葉は宮殿の中庭のように見え、朝日が射す様子は別世界です。冬を迎えた木々の多くは赤い実を付け、実を落とした木は、枝先に褐色の殻を残しています。

この季節は、満開の花が咲きそろう華やかな春とは違う植物の多様な姿が見られるので、凝視すると春よりも魅力的に感じられるかも知れない。

そして、１年最後の月であり、クリスマスを迎える今の時、生きていることの感謝と希望と喜びが心の奥から湧いてきませんか？

毎朝、芦花公園近くに暮らす人たちが集まり、ラジオ体操＋他の健康体操を続けている私どもからクリスマスの挨拶と自然の有形・無形の恵みへの感謝を伝え、共有したいと思います。

 Merry Christmas, viva Nature, and a Happy New Year!

近隣の自然の変化に目を向ける No. 64

　世田ヶ谷の初雪；　自然が造る白の造形美

　First snow in Setagaya;　The beauty of nature created by white

　　　　　 2022年 1月6日

1/6(木)、東京に今年初の大雪が降りました。粉雪が午後いっぱい降り続いたため木々が真っ白な枝に変容し、幻想的な美しさでした。4時過ぎにいつもの芦花公園に行ったところ、見慣れた景色が一変していたのです。春夏の景色を思い浮かべながら、寒さを忘れて園内を一周し次写真に収めました。帰宅し、30分ほどで作った写真アルバムと街灯を背景に降っている雪の動画です。

http://subsites.icu.ac.jp/people/yoshino/SnowingInRokaPark01062022.mp4

雪景色は翌朝も変わらず、朝の体操仲間と感動を分かち合いましたが、昼近くには枝木の雪は落ち、地面の雪も消えて行きました。雪について北陸、東北地方の人たちが抱いている感覚からすると、「ゆきはコンコン」と歌う子どものようで、何と脳天気な体験談よ、と言われるかもしれませんが、関東人の素直な体験でした。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 65

　2022年初の景色＠芦花公園；　自然・人・動物・植物　  
　Scenery at the beginning of 2022 in Roka park; nature, people, animals, plants

　　　　　 2022年 1月25日

2022年の世界は新型コロナのオミクロン変異株の爆発的拡大の危機から始まり、今も収まる見込みが見えない。外出を自粛し、マスク、消毒に心がけ、三密をさけながら生活が勧められているが、仕事、会話、交流、食生活、経済・文化活動などの人間としての基盤が損なわれ、未来に負の影響を残すのではないか、と小心な私は気になる。一方で、人間はそんな柔ではない、経験をバネとして新たな世界が築かれる、と前向きに捉えようとしている人がおられる。中世のペスト、100年前のインフルエンザ（スペイン風邪）パンデミックの歴史から教訓とし、近代医学をもってしても全世界で苦戦を強いられている新型コロナとの闘いから私たちは何を学ぶのか？自分事として、人類事としてもうしばらく向き合って行きましょう。

　私が過度の悲観に陥らならないよう心がけていることの一つは、自然の変化を見ながら生活すること。自分も自然の一部であり、自然の中で自然に支えられて生きている事を思うと、不思議に平安になれる。そこで身近な植物や気象、天体の変化に目を向け、写真に撮って友人とシェアすることが生活の一部となっている。これまでの65回以上の写真アルバムがその軌跡です。

　今号は、新年明けに初めて見た自然の景色、毎朝芦花公園で続けている体操とウオーキングの途中で見た初春の花々をアルバムにしてみた。夜明け前の東空には明けの明星（金星）が明るく輝いている。1年間で日の出時刻が最も遅い日(1/6, 6:52am)の体操は、互いの顔が識別できないほど暗いが、声を出しながら体操している。ラジオ体操が終える6:40には辺りが明るくなるので、親しい仲間と一緒に公園内を散歩する。妻は車椅子だが、園内の約100 mを自力で車椅子を押して歩く。それが体と気持ちのリハビリになっている。あるTV番組で、朝の太陽光を浴びて、身体を動かすと体全体が目覚め、心身共に健康的な一日が送れ、寝付きもよくなると言っていた。日光浴は免役力を強める（コロナへの抵抗力が増す）とも言われている。朝の体操にはそれらの効果があったようだ。

　真冬に咲く数少ない花の中で、枯れ枝に先ず花を咲せるのが紅梅、続いて、澄んだ甘い香りのするロウバイ（臘梅）、さらに地面から顔を出すスイセン（水仙）。椿も咲き始めているが、本番は2〜3月だ。

※当写真アルバムは、近隣で見かけた四季の花を中心に取り上げて来ましたが、もうすぐ2年（周り）になります。するとやはり取り上げる花の種類は2度、3度目の登場となるので、今号で一区切りとさせていただくことにします。

その代わり、私が8年程前から毎年訪れていた「本橋野草苑」の草木の花の写真を編集して発行することにさせていただきます。次号以降のアルバムは「2月の花」として1月末から数号に分けて発行する予定です。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

近隣の自然の変化に目を向ける No. 66

早春の雪； 季節は確実に変化している

　Early spring snow; the seasons are definitely changing

1/6の初雪から約1ヶ月後の2/10、天気予報通り東京は南岸低気圧による雪が降った。前日の予報では10cm近くの積雪となると警告されていたものの実際には、午後遅く間でみぞれで、夕刻から雪が地を白く染め始め、翌朝起きた時は止んでいて積雪は2cm程であった。そこでいつもの通り妻を車椅子に乗せ、芦花公園でのラジオ体操に出かけた。

公園内は部分的に薄雪で化粧されたような景色で静かな美しさに包まれていた。

体操している目の前に見える芦花恒春園（100年前に徳富蘆花が暮らしていた家屋）は雪で白く覆われ、いつもと違うたたずまいに思えた。園内を散策していると白い花が咲いていると思えたので近づいてみると、葉に残った雪であった。クヌギ林の北側は全面が薄雪で覆われた広場では、犬が主人の引く紐を引き寄せ遊びたげであった。

　新春から咲き出していた紅梅が今満開で、雪面の上に咲いている姿が優美であった。

その翌朝(2/12)、雪はすっかり消え気温は氷点下であった。花の丘の地面には霜柱ができ、寒さに強い三色すみれは霜に覆われても健気に耐えていた。そして驚いたことに、ホトケノザ（仏の座＝仏の台座に使われる開いたハスの花の形に似ている）がもう咲き始め、レンテンローズ（キリスト教会暦でレント＜受難節＝キリストが十字架に死に、3日目に復活した日の40日前間を覚えて祈り続ける期間＞に咲く美しい花）も咲き始めていた。オタフクナンテン（お多福南天＜難転＞＝難を転じ多くの福に恵まれるという民間の縁起かつぎ

）。　暗く寒く厳しい冬を耐えた者に明るく温かな春が近づいている事を告げる草花に出会えたようだ。  
　暦の上でも、すでに節分が過ぎ、春がすでに足下まで来ている事を知らせている。